Guy Gundaker から学ぶロータリー

～「A Talking Knowledge of Rotary」の世界 ～

日本人の「ロータリーの原点」は、ここにある

本書の内容は、Guy Gundaker 著『A Talking Knowledge of Rotary』の翻訳ではなく、あくまで解説です。というのは、今を生きる日本のロータリアンには、単なる翻訳だけでは理解が難しい箇所も多く、Guy Gundaker の意図も通じにくいと思うからです。しかも原著では、項目によって少なからず重複があったり、本来の主旨から外れてやや脱線気味な箇所もあったりします。

そこで本書では、『A Talking Knowledge of Rotary』の内容を私なりに整理しながら紹介し、我々日本人が考える“ロータリーの原点”は、実は“Guy Gundaker のロータリー観”にあることを皆様に知っていただくとともに、「それを今後のロータリー活動にどう活かすべきか、そしてどう活かせるか」ということを主眼に置いて、分かり易く解説することに努めました。

本書を読んでくださったロータリアンにおかれましては、Guy Gundaker の大ファンになっていただき、ロータリーを今まで以上に大好きになってくだされば、私にとって望外の喜びです。

（2015 年５月８日 初稿、2020 年４月 25 日 最終改訂 文責：鈴木一作）

＜目 次＞

はじめに・・・

5．附記（本解説書で、敢えて追加しておきたいこと）　・・・・・・・・・・・40
附記１ Guy Gundaker の ロータリー観 と「決議 23-34」
附記２ ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割（具体例）
附記３ 例会の大切さ
附記４ 充実したクラブ運営
①役員と理事
②幹事の任務
③委員会の任務
④会長の任務と幹事の立場
附記５ 新入会員に伝えて欲しいこと
附記６ ロータリーとは？

6．解説のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
●『A Talking Knowledge of Rotary』の 歴史的価値
●Guy Gundaker が考える「ロータリーの根本」
●Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」
●ロータリーの基本、応用、真髄
●「ロータリーの親睦」と「ロータリーの基盤」
●クラブ・リーダー と クラブ運営
●例会出席
●例会
●ロータリー入会の条件
●信用
●ロータリアン同士の商取引
●同業者の団体
●地域社会との関係
●ロータリーの教育的性格
●ロータリアンの利益
●真のロータリアン
●ロータリアンの喜び
●その他
附：「Guy Gundaker の ロータリー観」の 図式化

は じ め に

日本では最近、“ロータリーの原点に戻ろう”とか“ロータリー原点回帰”などの言葉を、よく耳にします。では、その『ロータリーの原点』とは何でしょう？　そして、それが本当に『ロータリーの原点』である根拠は何でしょう？　また、その原点とは、いつの時点のことを指しているのでしょう？

例えば、ロータリー創立時（1905 年）を『ロータリーの原点』と言う人がいます。しかし、それでは「異業種の実業人同士の親睦」と「実業互恵」の２つが原点になってしまい、少なくとも「奉仕」は含まれません。一方、最近の風潮である「職業奉仕の軽視」を心配してか、1915 年の道徳律（職業倫理訓）や 1927 年の四大奉仕分割を『ロータリーの原点』と主張する人がいます。また、1923 年に採択された『決議 23-34』を挙げる人もいます。ところが、そういう人達が語る『ロータリーの原点』は、決して『道徳律（職業倫理訓）』や『四大奉仕分割』や『決議 23-34』の内容だけではなく、それ以外の内容（例えば、親睦、学び、例会と出席、ロータリアンの矜持、奉仕と利益など）にも力点が置かれていたりするのです。

実は、Guy Gundaker の著作『A Talking Knowledge of Rotary』の日本語翻訳本である

●ロータリー通解（小堀憲助・訳）　　●ロータリーの心得（田中 毅・訳）

を読むと分かることですが、これまで日本の著名な先輩ロータリアンが書物や講演などで述べてきた『ロータリーの原点』や『ロータリーの根幹』、『ロータリーの在るべき姿』などは、その大部分が『A Talking Knowledge of Rotary』に掲載されている内容、または、それに準じた内容なのです。

それもこれも、『A Talking Knowledge of Rotary』はロータリーの本質を体系的に分かり易く、そして余すところなく解説した「ロータリーの教科書」だったからです。実際、日本のロータリー草創期の米山梅吉や福島喜三次らは、本書をクラブ運営の指針・手本として使っていました。しかも、その内容が日本人の感覚や商売道徳思想に合致していたこともあり、日本の名だたる職業人・経営者である当時のロータリアンに共感を以て受け入れられ、さらに上記の翻訳本のおかげもあって、益々広まっていったのです。以上のような背景から、日本の著名なロータリアンが『ロータリーの原点』という言葉を口にする時、それは Guy Gundaker のロータリー観であり、要するに『A Talking Knowledge of Rotary』なのです。本解説書をじっくり読んでいただければ、それが納得できると思います。

Guy　Gundaker

『A Talking Knowledge of Rotary』は、ロータリー誌「THE ROTARIAN」の 1916 年４月号、５月号、６月号、７月号に掲載された Guy Gundaker の記事「Educational Pamphlets for Rotarians」（pamphlets No1-No4）に基づいて、国際ロータリークラブ連合会の Committee on Philosophy and Education（理論・教育委員会 ＜委員長：Guy Gundaker＞）によって編集された４冊のパンフレットから成る小冊子です。その内容は、

当時のロータリーの「一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を体系化したもので、史上初めてのロータリーの教科書・解説書

と言ってもよいでしょう。

この小冊子は、1916 年７月の米国オハイオ州シンシナティ国際大会で「ロータリーのクラブ管理運営のテキスト」として採択・認証され、その後の普及にも弾みがつきました。

また、その小冊子には、1915 年の米国カルフォルニア州サンフランシスコ国際大会で採択された

「The Rotary code of Ethics For Business Men of All Lines」

（全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓 ：通称『道徳律（職業論理訓)』）

の全文も掲載されており、『道徳律（職業倫理訓)』の普及にも大いに貢献したと言えるでしょう。驚いたことに、こうした出来事は、第一次世界大戦（1914～1918 年）の最中に起きたのです。

さて、Guy Gundaker（1873～1960）の経歴についてですが、彼は米国フィラデルフィア・クラブの創立会員の一人で、職業分類はレストラン経営です。出身はペンシルバニア州で、コーネル大学、ペンシルバニア州立大学法学部を卒業し、1902 年に弁護士登録をしています。その後、彼はレストラン経営に身を転じていますが、全米レストラン協会を結成して「レストラン協会の道徳律（職業倫理訓）」を作ったことでも知られています。

実は、Guy Gundaker は 1923－24 年度のＲＩ会長です。したがって、日本人が重要視している『決議 23-34』の採択時（1923 年６月）は、ＲＩ会長エレクトでした。しかも、その決議には、後述の通り、『A Talking Knowledge of Rotary』の内容が色濃く反映されているのです。

また、1923 年（大正 12 年）９月の日本の関東大震災に際し、ＲＩその他から東京ＲＣ（当時の会長は米山梅吉）へ総額 89,000 ドル（42,000 ドルなど、諸説あり）の義援金を贈ってくれたのも、この時のＲＩ会長であった Guy Gundaker でした。日本にとっては、とても縁の深い人物なのです。

最近のロータリアンは、『A Talking Knowledge of Rotary』の存在はおろか、Guy Gundaker という名前すら知らない人も少なくありません。しかし、日本のロータリアンの心には、Guy Gundaker のロータリー観が知らず知らずのうちに根付いているのです。それだけに、ロータリーの “これまで” と“これから”を考えていく上で、日本の『ロータリーの原点』である『A Talking Knowledge of Rotary』を正しく理解しておくことは必要だと思うのです。これが、本解説書を世に出した理由です。

Guy Gundaker のロータリー観は多岐にわたりますが、その根本は、

●ロータリーは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させる運動である

●究極の目的は、世間から信頼・尊敬される素晴らしい真のロータリアンを育てることである

の２つと言ってよいでしょう。本解説書を読まれる際は、この２つを念頭に置いてください。

なお、気をつけて欲しいのは、本書で使われている『奉仕』という言葉の意味です。というのは、『奉仕』を“クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕”に分けて考えるようになったのは、1927 年の米国オステンド国際大会で「目標設定計画に基づく四大奉仕の分割」が採択されてからです。したがって、1927 年以前（つまり、『A Talking Knowledge of Rotary』が発行された 1916 年当時）は、

『奉仕』＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、あらゆる場面や状況での奉仕であり、これら全体を呼称して『社会奉仕』とも表現する

ということです。すなわち、現代における「社会奉仕（＝ 地域社会奉仕）」とは区別すべきであって、

本書で使われている『奉仕』＝ 1927 年以前の『社会奉仕』＝ あらゆる場面や状況での奉仕

＝ 現在のクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、その他の奉仕（家庭奉仕など）の総称

という理解が必要です。この点については、十分ご留意ください。

１．ロータリークラブの構成と目的

『A Talking Knowledge of Rotary』の最初のページには、以下のように記されています。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の **向上**

第２．会員の事業の **向上**（現実と理想の双方において **向上**）

第３．会員の同業者・業界全体の **向上**

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の **向上**

*A Rotary club consists of men **selected** from each distinct Business or Profession, and is organized to accomplish:*

*First: The **Betterment** of the Individual Member.*

*Second: The **Betterment** of the Member's Business , both in a practical way and in an ideal way.*

*Third: The **Betterment** of the Member's Craft or Profession as a whole.*

*Fourth: The **Betterment** of the Member's Home, his Town, State and Country, and of Society as a whole.*

先ず注目して欲しい点は、冒頭の

「ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた（selected）者を以て構成」

という表現です。これは『一業種一会員制』という規定であると同時に、後述するように

「ロータリーから各々の職種・業界に送られた代表者（大使）としての認識や義務を求める」

という規定でもあるのです。（→ P10『１．【３】会員の職種・業界全体の向上』参照）

二つ目の注目すべき点は、上記の第１～第４までの全てに『**向上（Betterment)**』という言葉が使われていること。すなわち、

「ロータリークラブは、『向上』が目的である」

と明記されていることです。しかも、上記の文章には、ロータリー創立（1905 年）当初における目的の１つであった『親睦』を示唆する表現すらないのです。すなわち、

「ロータリーでは、『親睦』は（後述するように必要で重要だが）目的ではない」

という意味でもあるのです。（→ P24『３．【２】「親睦（fellowship)」の正しい意味』参照）

三つ目の注目すべき点は、

「ロータリーは、自分自身、事業、同業者・業界、そして社会全体を向上させる運動である」

という Guy Gundaker のロータリー観の根本（→ P4 参照）の１つが、上記の文章で述べられていることです。

四つ目の注目すべき点は、

「こうした Guy Gundaker の考え方は、1923 年に採択された『決議 23-34』の冒頭の文章、そして現在の『ロータリーの目的（第３)』に受け継がれていった」

ことです。

なお、この四つ目の注目すべき点については、

『５．附記１ Guy Gundaker のロータリー観と「決議 23-34」』（← P40 参照）

で詳しく解説しています。ここでは参考までに、その『決議 23-34』の冒頭の文章と『ロータリーの目的（第３）』の内容のみを提示しておきます。

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてが、その個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

＜ロータリーの目的（第３）＞

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること

さて、ここからは『ロータリークラブの構成と目的』の第１～第４の詳細について、順番に解説していきます。

【１】会員一人一人の向上 ～～～

ところで、皆さんのクラブの例会では、上記の５項目で述べられているように

１）会員同士の情報交換の時間、事業経営に関する会員スピーチの機会は、十分ありますか？

また、会長挨拶、例会プログラム、そして各種委員会活動は、

２）会員の思考の幅を広げて、向上心を奮い起し、

３）奉仕の心を育て、

４）会員自らの発展や可能性の拡大に繋がり、

５）社会のより良い指導者として成長していく

ことに、大いに貢献できているでしょうか？

「不易流行」という言葉がありますが、私は、

“Guy Gundake が記した＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞の５項目は、『ロータリークラブの在るべき姿』として最も大切にし、かつ変えてはいけないもの”

だと思います。特にクラブ会長には、最も留意して欲しい５項目です。

【２】会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）～～～～～～～～～～～～～

次は、第２「会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）」についてです。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の向上

第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

＜現実面＞

ロータリー活動を通して会員間に友情に満ちた親密な付き合いが生まれ、取引増加の機会が与えられる。

（但し、与えられるものは、取引増加の「機会」だけである）

＜理想面＞

ロータリー活動を通して、事業における高い倫理基準と正しい経営方法が体得できる。そして、個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本でもあり、かつ職業倫理全般にも通じる「奉仕という生き方（ロータリーの理想）」を会員一人一人が学び合い、実践することで、事業が向上・発展する。

第３．会員の同業者・業界全体の向上

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

前半の **＜現実面＞** の項目に書かれている内容について、Guy Gundaker は

“ロータリアンは、普段のロータリー活動を通して、他の会員から『信頼』を得ることが何よりも大切です。ロータリーは職業人の集まりなので、本来、「商取引増加の機会」は備わっています。したがって、その『信頼』という財産を活かしながら、優れた商品、適正な価格などの『奉仕』に徹していけば、事業は向上・発展していくのです。”

という主旨の説明をしています。

もう少し分かり易く言えば、

“ロータリーに入会しても、商取引が増えると思うな。入会後、ロータリー活動を通じて『信頼』や『人柄』が皆から認められるようになって初めて、『商取引増加の機会』に恵まれたロータリーを活かせるようになり、自己の事業の向上・発展にも繋がるのだ。”

という意味です。この内容は、新入会員には必ず説明して欲しいと思います。

（← P30、P48『５．附記５ 新入会員に伝えて欲しいこと』参照）

また、上記の **＜現実面＞** の最後に記されている

「但し、与えられるものは、商取引増加の『機会』だけである」

について、Guy Gundaker は

“ロータリアン同士の商取引は、ロータリーの義務ではない。ロータリーの本質でもない。ロータリーの存在理由でもない。あくまで商取引増加の『機会』があるというだけで、ロータリーにおいては、ロータリアン同士の商取引は単なる付随的な要素に過ぎない。”

と説明しています。要するに、彼は

「ロータリー創立以来の目的の一つであった『実業互恵』からの脱却を求めている」

ということです。

次に、後半に記されている **＜理想面＞** についてですが、

「ロータリー活動を通じて『事業推進に必要な倫理および経営方法』と『ロータリーの理想（奉仕という生き方）』を学び、それらを日常生活の中で実践すれば、やがて事業は向上・発展する」

というように理解すればよいでしょう。

その上で、『事業推進に必要な倫理および経営方法』と『ロータリーの理想（奉仕という生き方）』を示すスローガンとして、彼は

- **Service, Not Self**
- **He Profits Most Who Serve s Best**

という、ロータリーの２つの標語（Motto）を挙げています。

但し、後述するように、Guy Gundaker はロータリーの２つの標語（Motto）について、なぜか詳しい解説をしていません。その理由については、

『２．【３】ロータリアンにとって「利益」とは？』（← P21参照）

の項目で述べた解説を参考にしてください。

（なお、現在のロータリーの標語は、前者については「**Service Above Self**」に、後者については「**One Profits Most Who Serves Best**」に変更されています。）

ご存知のように、このロータリーの２つの標語（Motto）の関係を明記したものが、1923年に採択された『決議23-34』の １）の文章です。ここでは、『A Talking Knowledge of Rotary』の解説という本解説書の主旨からは少し外れますが、ロータリーにとって重要な２つの標語（Motto）の理解のためにも、『決議23-34』の １）の内容を以下に提示しておきます。参考にしてください。

＜決議 23-34 の １）：公式和訳＞

ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―「超我の奉仕（Service Above Self）」の哲学であり、これは、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる（He Profits Most Who Serves Best）」という実践的な倫理原則に基づくものである。

＜参考：決議 23-34 の １）を分かり易く要約した文章＞

ロータリーの根本は、利己と利他の心を上手く調和させる「超我の奉仕」という名の人生哲学です。それは、実生活上、実に道理にかなった「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という言葉を原理原則とした人生哲学です。

（前段の「公式和訳」は少し分かりづらいので、分かり易く要約した文章を後段に追加しました）

さて、Guy Gundaker は、『ロータリークラブの構成と目的』の「第１」と「第２」について説明した直後に、以下のような主旨の文章を挿入しています。

このようなロータリーの活動は、『**ロータリーの基本（Fundamental Rotary）**』であり、会員の心に関わるものだけでなく、事業経営の精神にも関わるものである。そして、この活動はクラブ・リーダーの責務でもある。

一方、ロータリーで十分な経験と学びを重ねていくうちに、ロータリアンとして活動したくなる奉仕の分野が別に２つある。その２つは『**ロータリーの応用（Applied Rotary）**』と呼ばれるもので、『**ロータリーの真髄（The essence of Rotary）**』と言ってもよい。もちろん、ロータリーで十分に教育と訓練を受けたロータリアンなら、そうした活動（**Rotary - at - Work**）を自然と始めてしまうだろう。それは、クラブ会員の責務である。

その上で、その２つの『ロータリーの応用（Applied Rotary）』として、次の「第３」と「第４」の説明を始めるのです。

上記の内容を分かり易くまとめると、以下のようになります。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

●ロータリーの基本：クラブ・リーダーの責務

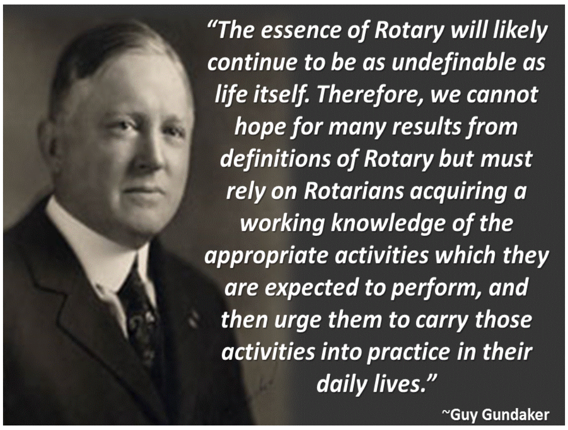
第１．会員一人一人の向上（会員の心に関わるもの）

第２．会員の事業の向上（事業経営の精神に関わるもの）

●ロータリーの応用（ロータリーの真髄）：クラブ会員の責務（Rotary - at - Work）

第３．会員の職種・業界全体の向上

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上



Guy Gundaker は、左写真の文章にあるように、『ロータリーの応用（Applied Rotary)』とは、上記の「第３」および「第４」に関する日常生活での活動（Rotary‐at‐Work）そのものであり、それこそが、『ロータリーの真髄（The essence of Rotary)』であると考えていたのです。

The essence of Rotary put‐to‐service becomes "Rotary applied."（Guy Gundaker）

なお、この「ロータリーの基本と応用」については、Guy Gundaker は後半でも再度詳しく説明しています。（→ P32『４.【１】ロータリーの基本と応用』参照）

以下、『ロータリークラブの構成と目的』の「第３」と「第４」について、解説を続けます。

【３】会員の職種・業界全体の向上 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次は、第３「会員の職種・業界全体の向上」についてです。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の向上

第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第３．会員の同業者・業界全体の向上

ロータリアンは、各々の職種・業界にロータリーから選ばれて送られた代表である。したがって、ロータリアンは各々の職種・業界において職業倫理と奉仕を普及させる義務があり、それによって職種・業界全体が向上・発展していく。

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

ここでは、Guy Gundaker は

「ロータリアンは、ロータリーから各々の職種・業界に送られた代表者（大使）である以上、他の同業者に働きかけながら、職業倫理と奉仕の普及に努めるべきである」

と述べた上で、

「自己の職種・業界全体を向上・発展させていくという"認識と義務"を、ロータリークラブ会員は持たなくてはならない」

と強調しています。

上記の内容は、以前ならクラブのベテラン会員がよく口にされていた言葉ですから、多少の経験年数のあるロータリアンなら聞いたことがあると思います。しかし、最近はクラブ内のロータリー教育が疎かになってきたせいか、上記の"認識と義務"を知らない、または聞いたこともないというロータリアンが少なくないようです。私としては、とても残念です。

実は、この第３「会員の職種・業界全体の向上」の解説の最後に、Guy Gundaker の言葉

“This is Rotary’s greatest opportunity for service”

があります。すなわち、

「会員の職種・業界全体の向上をもたらすことは、
ロータリーにとって最大の奉仕の機会である」

ということです。

なお、ここの「会員の職種・業界全体の向上」の内容については、Guy Gundaker は

『２．【２】③同業者の団体における活動』（← P19 参照）

『４．【２】自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」』（← P33 参照）

の項目でも重複して述べていますので、参考にしてください。

【４】会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上 ～～～～～～～～～～～～～～

次は、第４「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」です。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは異なった事業または専門職種から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の向上

第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）

第３．会員の同業者・業界全体の向上

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

ロータリーの世界は、会員をより良い市民、より良い商工会議所の会員、より良い国民となるように 訓練する ものである。それによって、市民生活と慈善行為の両面が実りあるものとなり、会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体が向上していく。

これについては、

「ロータリーでより良い人間に成長すれば（ ＝ 訓練）、より良い実りある生活、
より心のこもった交流や奉仕ができるようになり、それによって皆が幸せになっていく」

という理解でよいと思います。

なお、上記の文章に出てくる『訓練する（train）』という表現については、

「ロータリーの例会は、人生の道場である」、「入りて学び、出でて奉仕せよ」、「自己研鑽の奉仕」など、まさにロータリー特有の格言とも言える言葉を思い出します。実際、Guy Gundaker は、後述するように、他のクラブにはないロータリーの大きな特徴として、

「教育的性格（educational in character）」（← P14参照）

を挙げているのです。

実は、Guy Gundaker のロータリー観の根本は

「自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させるために、
ロータリークラブは、素晴らしい真のロータリアンを育てる（＝ 訓練）」

というものであり、そのためのテキストが、この『A Talking Knowledge of Rotary』なのです。

さて、Guy Gundaker は、ここの第４「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」に関連して、以下に記した６つについても述べています。

１）地域社会の状況や活動については、ロータリーの会合で自由な討議がなされるべきである。
２）会員が市民生活の向上のために積極的に活動・参加できるよう、知識や知恵を提供するのは、クラブ役員の義務である。
３）一般的には、市民生活に対するロータリアンの関心は、ロータリークラブとしての活動より、むしろ個人として、または商工会議所の会員としての活動に結びつくべきである。
４）社会奉仕のためにロータリークラブが団体行動をするのは、特別な場合ならよい。但し、事前に慎重な配慮が必要である。特に、ロータリークラブとしての活動が、どの町にもあるような専門事業団体の活動と重複するものであってはならない。
５）地域社会のことで政党が決定した内容については、クラブとして賛否の意思表明をしてはならない。これは、クラブ会員間の尊い友情を守るためである。
６）ロータリーの慈善事業については、どんな制限も決まりごともない。したがって、どのような慈善事業を実施してもかまわない。

上記の １）～ ５）は、じっくり読んでいただければ自明のことであり、解説は不要でしょう。ロータリアンなら当然のことであり、またロータリークラブとしても当然のことだと思います。

しかし、６）の内容については、疑問を抱いた人がいると思います。特に、「６）の内容」と「３）と ４）の内容」を比較した場合、矛盾を感じた人も少なからずいたのではないでしょうか。多少、本筋からは逸れますが、これについて少し解説します。

３）と ４）をまとめれば、

“市民生活についてロータリアンが関心を持つことについては、条件さえ合えばロータリークラブによる社会奉仕事業として団体行動をしてもよい。しかし、本来は、むしろ個人としての奉仕活動として行なうべきである。“

という内容です。

これに対して、６）は

「ロータリークラブは、慈善事業を行うのは何ら差し支えない」

という内容です。

要するに、当時は、

“ロータリークラブによる社会奉仕事業としての「団体行動」とロータリークラブによる「慈善事業」とは別物である。”

という認識があったということです。

ここで言う「クラブによる慈善事業」というのは、欧米特有の小規模なチャリティー活動のようなものであって、そのような活動なら、クラブとして主催するのは問題視されなかったということでしょう。

ところで、上記の 3）と 4）の内容は 1923 年に採択された『決議 23-34』の 6）、すなわち、以下の「社会奉仕活動の選択指針」と似ていることにお気づきになられたでしょうか。

＜決議 23-34 の 6）＞「社会奉仕活動の選択指針」

個々のロータリークラブの社会奉仕活動の選択を律する規定は別に設けられていないが、これに関する指針として以下の準則が推奨されている。

a）ロータリーの会員の数には限りがあるので、ロータリークラブは、市民全体の積極的な支持なくしては成功しえないような広範囲の社会奉仕活動は、他に地域社会全体のために発言し、行動する適切な市民団体などの存在しない土地の場合に限り、これを行うこととすべきであり、商工会議所のある土地では、ロータリークラブはその仕事の邪魔をしたり、横取りをしたりすることのないようにしなければならない。しかし、ロータリアンとしては、奉仕を誓い、その理念の教えを受けた個人として、その土地の商工会議所の会員となって活動すべきであり、また、その土地の市民として、他の善良な市民と一緒に、広くすべての社会奉仕活動に関与し、その能力の許す限り、金銭や仕事の上でその分を果たすべきである。

b）一般的に言って、ロータリークラブは、どんな立派な事業であっても、クラブがその遂行に対する責任の全部または一部を負う用意と意思のない限り、その後援をしてはならない。

c）ロータリークラブが奉仕活動を選ぶ場合に宣伝をその主たる目標としてはならないが、ロータリーの影響力を拡大する一つの方法として、クラブが立派に遂行した有益な事業については正しい広報が行われるべきである。

d）ロータリークラブは、仕事の重複を避けるようにする必要があり、総じて、他に機関があり、それによって既に立派に行われている事業に乗り出すようなことをしてはならない。

e）ロータリークラブの奉仕活動は、なるべく現存の機関に協力する形で行うことが望ましいが、現存機関の設備や能力が目的の遂行に不十分である場合には、必要に応じ、新たに機関を設けることにしても差し支えない。ロータリークラブとしては、新たに重複した機関をつくるよりも、現存の機関を活用することのほうが望ましい。

f）ロータリークラブはそのすべての活動において、宣伝者として優れた働きをし、多大の成功を収めている。ロータリークラブは地域社会に存在する問題を見つけ出すことはしても、それがその地域社会全体の責任にかかわるものである場合には、単独でそれに手を下すようなことはしないで、他の人々にその解決の必要を悟らせる努力をし、地域社会全体にその責任を自覚させて、この仕事がロータリーだけの責任にならないで、本来その責任のある地域社会全体の仕事になるようにしている。また、ロータリーは、事業を始めたり、指導したりするが、一方、当然それに関心をもっていると考えられるほかのすべての団体の協力を得るように努力すべきであり、そして、当然ロータリークラブに帰すべき功績であっても、それに対する自分のほうの力を最小限度に評価して、そのすべてを協力者の手柄にするようにしなければならない。

g）クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアンの個々の力を動員するもののほうがロータリーの精神によりかなっていると言える。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられたいわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである。

（下線部が類似する内容）

『決議 23-34』は、しばしば「職業奉仕・個人奉仕」推進派と「社会奉仕・団体奉仕」推進派との妥協の産物だったと言われます。妥協の産物とは、特に上記の『決議 23-34』の ６）を指しているのですが、実際には、その７年も前の 1916 年に、Guy Gundaker が既に本書で提示していた要点を詳述したものに過ぎません。

前述したように、『決議 23-34』の採択当時（1923 年６月）、Guy Gundaker はＲＩ会長エレクトでした。もちろん、翌７月からはＲＩ会長です。そのことを考えれば、『決議 23-34』に彼のロータリー観が色濃く反映されていたことは、不思議ではないのです。

【５】ロータリーの特徴 ～～～

例えば、

＊1947-48年度のＲＩ会長 Kendrick Guernsey の言葉

“Enter to learn, go forth to serve.”

（入りて **学び**、出でて奉仕せよ）

＊1954-55年度のＲＩ会長 Herbert J Taylor（四つのテストの創始者）の言葉

“Rotary is maker of friendships and builder of men.”

（ロータリーは友情を作り、**人を作る**）

＊1974-75年度のＲＩ会長 William R Robbins の言葉

“Rotary’s first job is to build men.”

（ロータリーの第一の仕事は、**人作り** である）

私自身、これまで講演などで「最も簡潔なロータリーの定義」について語る時、

「ロータリーは、

①ロータリアン同士の親睦を基盤に、

②立派なロータリアンを 育てながら、

③価値ある奉仕を通じて

社会に貢献する世界的な団体である」

という説明をしています。（→ P49『５．附記６ ロータリーとは？』参照）

ちなみに、③の価値ある奉仕の中で最も重要なのは、言うまでもなく職業奉仕です。

いずれにしても、「ロータリーの教育的性格」なくして、私はロータリーを語れません。

なぜなら、私自身が次のように思っているからです。

＜ロータリーは、人生を豊かにする＞

私は、ロータリーに入会したおかげで、本来なら出会うことすらなかったであろう立派な方々と友達になり、彼らのロータリアンとしての職業観や人生観、仕事ぶり、生き方、そして人柄に触れながら、事業の手続きや成功の道筋、職員管理、自己管理、円満な人間関係の在り方などを学び磨く中、いつしか自分も価値ある立派な生き方（ロータリー精神の涵養と実践）に励むようになるとともに、本来なら経験できなかったであろう素晴らしい機会や感動にも恵まれました。言い換えれば、私はロータリーのおかげで人間的にも成長し、人生を豊かにしてもらったのです。

さて、上記の ３）の前半には、「ロータリーに関する多くの先例が積み重ねられ、かつ多くの著述が残されてきた」と記されています。

確かに、1916年以前にも Paul Percy Harris や Arthur Frederick Sheldon などの重要論文は多数ありますし、ロータリー誌「THE ROTARIAN」にも貴重な記事や論文が掲載されてきました。しかし、当時の「ロータリーの一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を、ここまで見事に体系化した著述は、『A Talking Knowledge of Rotary』以外にはありません。しかも、その後のロータリーの発展（特に日本）に、本書ほど貢献した著述もないでしょう。

2．ロータリアンたる者、かくあるべし

私は、本項目『2．ロータリアンたる者、かくあるべし』こそ、現代の世界中のロータリアンに銘記して欲しいと思います。まさに、ロータリアンの矜持とも言うべき内容が記されているからです。それだけに、本項目を読むと、

「ロータリアンたる者、次の４つについて明確な回答を持つと同時に、
その自らの回答に相応しい実践をしなくてはならない」

という Guy Gundaker の強い意思を、私は感じるのです。すなわち、

1．ロータリアンにとって **「例会出席」** とは？
2．ロータリアンにとって **「活動」** とは？
3．ロータリアンにとって **「利益」** とは？
4．ロータリアンにとって **「究極の目的」** とは？

なお、本項目の内容はロータリー全般に及ぶだけに、Guy Gundaker 自身、他の項目と重複する主張を少なからず述べています。ここでは、それら重複部分については敢えて簡単に記しながら、“ロータリアンたる者、かくあるべし”という Guy Gundaker の想い（気概）を中心に解説していきます。

【1】ロータリアンにとって「例会出席」とは？ ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

最初に、Guy Gundaker は

「ロータリーに、欠席は有り得ない」

と強調しています。その上で、クラブ・リーダーは、ロータリーに入会が認められた者に対して

「名誉あるロータリアンという地位を引き受けた以上、ロータリーの全ての例会へ
常に出席する義務を負う」

ことを、必ず告げなければならないと述べています。

また、ロータリー入会の条件としては、

＜ロータリー入会の条件＞
①事業の管理者であること
②管理経営する事業所が、その職種・業界において指導的立場にあること
③人柄が高潔で、誰からも信頼・信用されていて、社交性がある人物
④入会後、ロータリーに対する熱意を持つであろう人物
⑤入会後、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物
⑥入会後、ロータリアンとしての実践活動を怠らないであろう人物

を挙げながら、会員選考については、

「①②③について申し分ないことが、何よりも大切である」

とした上で、

「それに加えて、④⑤⑥の全てに十分な期待を持てる人物であることが必須である」

と述べています。

私は、上記の「ロータリー入会の条件」は、実に良くできていると思います。当 2800 地区の伊藤巳規男パストガバナーは、

“ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい。”

が口癖です。それは、

“ロータリーへ入会する以上、①②③は当然だ。しかし、それだけではロータリアンにはなれません。④⑤⑥も確かな人こそ、ロータリアンになれる人なのです。”

という意味だそうです。伊藤巳規男パストガバナーの言葉は、蓋し名言です。

Guy Gundaker は、特に⑤の「入会後、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物」について、

“ロータリー入会後、例会欠席が多い会員に対しては、罷免など、厳しい断固とした措置をとるべきである。それは、欠勤が多い社員を解雇するのと同じことである。”

と述べています。まさに、Guy Gundaker のロータリーに対する強い思い入れを感じさせる言葉です。彼は、その上で、

“出席率が高く、退会しない会員こそ、クラブの大きな財産である。入会・退会が（転職や退職以外の理由で）毎年のように繰り返されるクラブは、衰退する運命にある。”

と強調しています。日本のクラブでは、罷免は大袈裟と思う人が多いでしょうから、私としては

「例会に欠席が多い会員はクラブを衰退させるので、入会後の声がけと教育が重要である」

と言い換えて、皆様にお伝えしておきたいと思います。

なお、⑥の「ロータリアンとしての実践活動」についてですが、その内容は次の項目で詳しく説明します。

【2】ロータリアンにとって「活動」とは？ ～～～

上記の内容を簡潔に述べれば、

ロータリアン個人としての活動 ＝ 自己の事業や専門職務において実践する『職業奉仕』

ということです。すなわち、決して、プライベートな活動という意味ではないのです。

さらに、Guy Gundaker は

“ロータリーとは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会を向上させるという「向上運動」以外の何物でもない。”（← 下記の第１～４参照）

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の **向上**

第２．会員の事業の **向上**（現実と理想の双方において **向上**）

第３．会員の同業者・業界全体の **向上**

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の **向上**

と述べ、

“その向上の成否は、ロータリアンの個人としての活動（職業奉仕）にかかっている。すなわち、『道徳律（職業倫理訓）』に記されたロータリーの諸原則を、自己の事業や専門職務において、ロータリアン一人一人がどこまで実践するかにかかっている。だからこそ、ロータリアン個人の活動（職業奉仕）こそ、最も重要なのである。”

と明記しています。その上で、

「ロータリアンは安心して取引のできる人物であることを、世に知らしめるべきである」

と述べ、だからこそ、

「全てのロータリアンは、信頼と奉仕の象徴として、常にロータリーのバッジをつけなければならない」

と強調しているのです。

②ロータリークラブにおける活動

Guy Gundaker は、ロータリアンにとって、

「ロータリークラブにおける活動は、個人の活動に次いで、二番目に重要である」

と述べた上で、

“ロータリアンは、例会で提起される全ての問題について積極的に討論しなければならない。さらに、自らの事業または専門職務について話す機会が提供されなければならない。例え、昼食や晩餐の場であっても、意見の交換は行われなければならない。なぜなら、ロータリアンが集う会合は、職業を異にする者から有用な情報が得られたり、困難な問題に対して別な角度から解決の糸口がもたらされたりするからである。”

と説明しています。言い換えれば、

「ロータリークラブにおけるロータリアンの活動とは、例会において、会員同士が語り合うこと（討論、情報交換、意見交換）である」

ということです。要するに、ゲスト卓話者の話を聴くことや奉仕プログラムを行なうことも大切ですが、会員同士が語り合うことこそ「ロータリークラブ本来の姿」だという意味です。

これに関連して、Guy Gundaker は

“一業種一会員制のおかげで、ロータリアン同士の話し合いは、他の実業家同士が意見の交換をする場合よりも、安心して打ち解け合った雰囲気となるだろう。”

と述べています。つまり、

“この一業種一会員制がもたらす会員同士の信頼や敬愛の繋がりの中、自分の仕事に参考となる意見や情報をより得やすいというメリットを、十分に活かすべきである。”

というのが、Guy Gundaker の考え方です。それだけに、彼は

「ロータリー運動におけるクラブの価値は、ロータリアンがクラブの例会にどのくらい積極的に出席するかにかかっている」

と述べ、「例会出席」の重要性を強調しているのです。

高度情報社会と言われる現代社会では、Guy Gundaker が活躍した100 年前のロータリー草創期に比べれば、クラブの例会で自分の仕事に役立つ意見や情報が得やすいという利点は少ないかも知れません。

しかし、地域を代表する、かつ功成り名を遂げ、奉仕の精神に満ちたロータリアンが集う例会では、互いの話を通して自分の事業訓や生活信条、人生観に良い影響をもたらす機会は多いはずです。実際、そういう機会を通じて，少なくとも私は人間的にも成長させてもらいました。まさに、「ロータリーは、人生を豊かにする」と思うのです。（← P15 参照）

そういう意味でも、私は

「例会では、会員同士が胸襟を開いて真摯に語る（または語り合う）時間こそ大切だ」

と思います。要するに、会員スピーチやフォーラムの機会や時間を十分に設けるべきです。ロータリー章典にも、

「ロータリークラブは、クラブ用務、活動、クラブ行事について、討議のための例会（フォーラムなど）を定期的に開くよう奨励されている」

と記されているのです。

例えば、クラブ協議会をはじめ、特別なテーマを設けてのクラブ・フォーラム、周年事業のための討論会なども、これにあたります。皆さんのクラブでは、こうした討議のための例会は、定期的に開かれているでしょうか？

③同業者の団体における活動

Guy Gundaker は、

「ロータリアンが同業者団体（業界）の会合に出席するということは、ロータリーがその業界へロータリーの大使（メッセンジャー）を派遣したという意味であり、ロータリアンは、当然、その大使としての『役割』を果たさなければならない」

と明記した上で、その『役割』とは、

「同業者にロータリーの原理と理想を説き、職業倫理の価値と利他主義の精神を伝えるとともに、業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせることである」

と述べています。

要するに、同業者の団体におけるロータリアンの活動とは、

「ロータリーからの大使（メッセンジャー）として、高い職業倫理基準と奉仕理念を業界に広め、その業界をより良くしていく」

ということです。この考え方は、Guy Gundaker のロータリー観における大きな特徴の１つでもあります。

なお、ここの「③同業者の団体における活動」については、

『１．【３】会員の職種・業界全体の向上』（← P10 参照）

『４．【２】自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」』（← P33 参照）

の項目でも、重複して述べられています。

④公共的かつ慈善的奉仕

Guy Gundaker は、

“ロータリーは、会員をより良き市民に、同業者団体のより良きメンバーに成長させるための訓練の場である。したがって、ロータリアンは、その地域社会、業界、そして所属する公共的な慈善団体において、積極的に価値ある行動をしなければならない。“

と述べています。

要するに、「ロータリーの教育的性格（訓練）」（← P14 参照）を強調した上で、

「入りて学び（→ 訓練の場）、**出でて奉仕**（→ 積極的に価値ある貢献）**」**（← P15 参照）

を説いているのです。

なお、上記の

「地域社会、業界、そして所属する公共的な慈善団体において、積極的に価値ある行動」

という考え方は、1923 年に採択された『決議 23-34』の冒頭の文章、さらには現在の『ロータリーの目的（第３）』に繋がるものです。このように、Guy Gundaker の想い（気概）は、今も綿々と生き続けているのです。

（← P40『５．附記１ Guy Gundaker のロータリー観と「決議 23-34」』参照）

ここでは再度、『決議 23-34』の冒頭の文章と『ロータリーの目的（第３）』の内容を提示しておきます。

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて社会奉仕とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

＜ロータリーの目的（第３）＞

ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること

【３】ロータリアンにとって「利益」とは？ ～～～

実際、次の『【４】ロータリーの「究極の目的」とは？』で、彼は

「人間性の向上」という成長を通じて、「素晴らしい真のロータリアン」になること

を最も重要視しています。これはあくまで私見ですが、もしかしたら Guy Gundaker は、ロータリーの二つの標語（Motto）を快く思っていなかったのかも知れません。

【４】ロータリーの「究極の目的」とは？ ～～～

さて、ここまで本解説書を読み進めてこられた皆様には、現在の『ロータリーの目的』を再度じっくり読んでいただき、その内容を短い言葉で述べるとすれば、どういう表現になるかを考えてくだされば幸いです。

＜ロータリーの目的＞

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むこと にある。具体的には、次の各項を奨励することにある：

第１ 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること；
第２ 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること；
第３ ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること；
第４ 奉仕の理念で結ばれた職業人が、世界的ネットワークを通じて、国際理解、親善、平和を推進すること。

Guy Gundaker を信奉する私としては、上記の『ロータリーの目的』を短い言葉で述べるとすれば、

“世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になろう！”

だと思っています。言い換えれば、

「素晴らしい真のロータリアン」の具体的な姿が、「ロータリーの目的」に記されている

ということです。

いずれにしても、当時のロータリーの「一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を体系化し、史上初めてのロータリーの教科書・解説書として1916年に発行された『A Talking Knowledge of Rotary』には、現代のロータリーにも通じる重要事項が満載です。

そういう意味では、

「古くて新しい Guy Gundaker の ロータリー観」

と言っても良いのではないでしょうか。

まさに、

“Guy Gundaker の前に Guy Gundaker なし。
Guy Gundaker の後に Guy Gundaker なし。”

だと思います。

私は、Guy Gundaker が大好きです。
まさに今、私が Guy Gundaker に贈りたい言葉は、

“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”

３．会員に対する「ロータリークラブの義務と責任」

本項目は、「クラブ奉仕」の在るべき姿を述べたものと言ってよいでしょう。当然、ロータリーの親睦、例会、各種行事などが主たる内容ですが、それらを計画立案して実施する「委員会、理事会、特に会長の義務と責任の重さ」を強調していることが大きな特徴と言ってよいでしょう。すなわち、Guy Gundaker は、

“クラブ行事、特に例会の充実こそが、「ロータリーと社会の発展」に繋がるのである。そして、その責任者はクラブ会長である。”

と考えているのです。別な言い方をすれば、

“クラブ行事、特に例会の充実を疎かにしたまま「社会の発展」を目指す奉仕団体に徹すれば、やがてロータリーは衰退する。それだけに、クラブ会長のリーダーシップが重要である。”

ということです。

【１】クラブの「問題点の発見」と「改善」～～～

「ロータリーの親睦（fellowship）」を正しく理解するには、“acquaintance”と“friendship”と“fellowship”の違い を知っておかなくてはなりません。すなわち、

- “acquaintance”＝「知り合い程度の交友」
- “friendship”＝「親しい者同士の友情」
  （目的や理念には関係なく、親しい友人の間柄で使われる言葉）
- “fellowship”＝「志が同じ者同士の仲間意識」
  （チームや組織、団体など、目的や理念が同じ者同士の間柄で使われる言葉）

上記を読めば分かるように、ロータリークラブは「同じ目的と理念を持つ組織」である以上、その会員であるロータリアン同士の間柄は、“acquaintance”や“friendship”ではなく、“fellowship”であることは明白です。すなわち、

「ロータリーの親睦（fellowship）とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識」

なのです。したがって、前述した Guy Gundaker の「親睦」に対する考え方は、

“ロータリーという苗木が立派に成長していくためには、
「ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識」を強め高め合う「親睦」という
栄養に満ちた土壌が必要である。“

というように理解すればよいでしょう。

次に、ロータリーの親睦（fellowship）を育む『場』、すなわち、「ロータリーの志を共にする仲間意識」を強め高め合う『場』について考えてみましょう。もちろん、そういう『場』としては、ロータリーの例会を真っ先に挙げなくてはなりません。他にも、近隣クラブとの合同例会、ＩＭ、ＰＥＴＳ、地区研修・協議会、地区セミナー、地区大会、さらにはロータリー研究会、ＧＥＴＳ、国際協議会、国際大会などもあてはまります。また、「ロータリーの目的」唱和、「ロータリーソング」合唱、奉仕プロジェクトなどの委員会活動、飲食を伴うロータリーの懇親の席なども、親睦を育む『場』に含まれると言ってもよいでしょう。要するに、

「親睦を育む場とは、ロータリアンが出会い集う場の全て」

なのです。

ここで、「ロータリーの親睦（fellowship）」についてまとめておきます。

＜ロータリーの親睦（fellowship）＞

ロータリーでは、ロータリアンが出会い集う全ての場（親睦を育む場）を通じて、ロータリアン同士の付き合いを

“acquaintance”（知り合い程度の交友）
→ “friendship”（親しい者同士の友情）
→ “fellowship”（ロータリーの志を共にする仲間意識）

へと深めていくと同時に、

“fellowship”をさらに強め高め合っていくことで、
栄養に満ちた“親睦”という土壌が醸成されていく。
これによって、ロータリーという苗木が立派に成長していくのである。

さて、Guy Gundaker は、良き親睦を作り出すものとして、以下の７つを挙げています。

＜ロータリーの良き親睦を作り出すもの＞

１．心のこもった握手
２．姓ではなく、名前で呼び合うこと
３．歌の合唱を行うこと
４．その人らしいウィットやユーモアに富む言動
５．会員間の思いやり、親切な行為
６．議長、会員、招待者などに対する礼儀正しさ
７．成熟した実業家たるロータリアンに相応しい紳士的振舞いと思慮深さ

Good fellowship is evidenced by:

1. *The hearty hand-shake.*
2. *The first-name acquaintance.*
3. *Chorus singing.*
4. *"Stunts" of a certain character.*
5. *Other kindlinesses shown by members to each other.*
6. *Courtesy exhibited to presiding officers, fellow members and guests.*
7. *The gentlemanly demeanor and the thoughtfulness which characterize the mature business-man.*

上記の１～４は米国らしさを感じさせますが、５～７は万国共通の必須事項と言ってもよいでしょう。なお、「４．ウィットやユーモアに富む言動（"Stunts" of a certain character）」の意味は、ウィットやユーモアを交えながら、相手に自らの良い人柄を印象づけ、好意を抱かせるような言動を心かけるということでしょう。これは、日本人には少し難しいかも知れませんね。

もう一つ、私としては、Guy Gundaker が上記５～７で言及している内容に関連して、

「ロータリアンは、他人の悪口や陰口を言ってはならない」

ということを、敢えて強調しておきたいと思います。

もちろん、意見を言うのは大いに結構です。しかし、他人の悪口や陰口を言っては駄目です。そういう人は、例外なく嫌われ、疎んじられ、やがては軽蔑されていくからです。

例えば、それが社会的に地位や役職の高い人だとしたら、周囲には「面従腹背」の者しかいなくなるでしょう。しかも、それがロータリアンだったら、ロータリーの「親睦」を台無しにする人物と言ってもよいでしょう。当然、それは上記５～７の精神に違反しますし、周囲から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になれるはずがありません。

これまで私は、信頼と尊敬に値する、素晴らしい真のロータリアンにたくさん出会いました。もちろん、経歴や考え方、性格などは人それぞれです。しかし、共通点が１つあります。それは、

「意見は言っても、他人の悪口や陰口は決して言わない人」

です。

【３】「例会」や「行事」の在り方 ～～～

それだけに、例会プログラムの年間スケジュールを計画立案する『年度当初の理事会』は、極めて重要です。なぜなら、例会プログラムの「年間スケジュールの計画立案」こそ、

●ＲＩの年度テーマ、地区目標、クラブ会長方針などの実現・達成に、果たして役立つものとなっているのか？

●会員自身の向上や会員の事業向上にとって、有意義な例会内容と言えるのか？

について、十分な審議・協議が必要だからです。

もちろん、その例会プログラムを実施する場合は、その例会の前々月および前月の理事会も極めて大切です。予算や準備、役割分担など、具体的な内容について詳細に審議・決定しなくてはなりません。

Guy Gundaker は、そうした計画立案や審議の流れの中で、

「クラブ会長は、強力なリーダーシップをしっかり発揮する責務がある」

と強調しています。彼は、

「理事が無関心であるからとか、委員が積極的でないからとかを理由に、クラブ会長はこの責務から免れることはできない」

とまで言っているのです。（← P45『５．附記４　充実したクラブ運営』参照）

②昼食例会について

Guy Gundaker は、

“通常１時間の昼食例会のうち、最初の半分は食事と親睦に使われる。したがって、単純計算で年間 52 時間の昼食例会があるとすれば、ロータリーの理想実現のために最大限に活用できる時間は、例会後半の僅か 26 時間しかないのである。”

と述べ、限りある少ない例会時間を有意義なものにすることを強く求めています。

●会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会

Guy Gundaker は、

「限りある少ない例会時間を有意義なものにするには、会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士が理解を深め合う例会であることが重要である」

と述べた上で、昼食会後半の年間 26 時間しかない行事に「卓話プログラム」を行うのは有効・効率的であり、その場合、クラブ・リーダーは以下の内容を考慮すべきであると強調しています。

＊クラブ会員またはゲストスピーカーによる卓話プログラム

Guy Gundaker は、クラブ会員やゲストスピーカーが自分の仕事などについて語る「例会卓話」の重要性について、次のように述べています。

“ゲストを招いてのスピーチは、会員にとって有益であることは言うまでもない。しかし、それ以上にクラブ会員のスピーチは有益であり、それを聴ける機会こそクラブ会員の大きな特権の１つである。なぜなら、スピーチを任せられたクラブ会員は、同業者の存在を気にせず、専門分野について正直に真実を語ることができるし、会員に役立つことを大いに教えることができるからである。”

＊ロータリーを学ぶための卓話プログラム

Guy Gundaker は、ロータリーの理解を深めること（ロータリー研修）だけを目的とした「特別昼食会」の重要性も説いています。すなわち、少なくとも６週間に１回は「特別昼食会」を開き、ロータリー情報委員会の担当のもと、ロータリーの原理について検討し、かつ深め合う卓話プログラムを求めているのです。その際、司会者を交代制にしたり、意見交換会をしたりなど、色々な人に発言させることで会員の成長を促すことも推奨しています。

実は、私のクラブ会長時代、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回２名ずつ（１人 15 分間）の会員スピーチ例会を年間９回行いました。また、同じテーマで、近隣クラブとも会長交換スピーチを行いました。それらは、親睦と敬愛の念を深め合っただけではなく、仕事やロータリー・ライフにも役立つ内容ばかりで、どれもが充実した例会だったと思います。皆さんのクラブでも、ぜひ試みてください。
（←ｐ41『５．附記２ ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割（具体例）』参照）

●会員の心に、最高の職業倫理基準を植え付ける例会

Guy Gundaker は、例会で『道徳律（職業倫理訓）』を唱和したり、解説したりする機会を設けるように推奨しています。今で言えば、『四つのテスト』や『ロータリーの目的』を皆で唱和したりすることに相当するでしょう。もちろん、唱和だけではなく、時には『四つのテスト』や『ロータリーの目的』を解説するような機会も設けるべきでしょう。

●奉仕の扉を開く例会

Guy Gundaker が残した数多くの名言の１つに、

「ロータリアンは、奉仕能力の涵養を切望し、かつ奉仕に専念する人である」

というのがあります。これは、

「ロータリアンは、ロータリーの原理を体得するにつれて奉仕能力が向上するだけでなく、進んで奉仕したいという意欲が湧き上がり、奉仕に身を捧げるようになる」

という意味です。その上で、

「奉仕とは、奉仕すべき『事』と『人』を行動に結びつけようとする心の過程である」

と述べています。言い換えれば、それが「奉仕を実践したいという『利他の心』の現れ」だということです。

だからこそ例会は、会員が奉仕の心を学び、理解し、価値ある実践に繋げていけるよう、奉仕の意欲を湧き立てていく場でなくてはなりません。それが、Guy Gundaker の言う「奉仕の扉を開く例会」という意味なのです。

最後に彼は、「専門職務（医師、歯科医師、弁護士、広告ライター等）の人に比べれば、企業主の奉仕の実践は大変である」ことを次のように述べて、企業主を鼓舞しています。

> “専門職務に従事するロータリアンは、個人差はあっても、普段から奉仕の実践をしていると言ってよいでしょう。しかし、同じロータリアンでも、従業員を多くかかえる企業主は、全ての従業員に奉仕の心を植え付けなければ、奉仕の実践をしているとは言えません。何度も繰り返し、植え付けていくしかないのです。”

●会員の事業に助力を与える例会

Guy Gundaker は、「どんなクラブ（教育、人間性向上、健康増進、社交など）であろうと、同じ組織に属する者同士、商取引の機会はあるだろう」と述べています。しかし、

「ロータリーでは、会員であるという理由だけで、商取引が増えるなどと考えてはいけない」

と戒めています。その一方、

“例会は、親しみと友情の種が蒔かれ、それが育つ場である。その種は、食事を共にするロータリーの例会では、すくすくと育ちやすい。そこに信頼と誠実に基づく真の友情が芽生えれば、商取引が増えるのは当然である。”

とも述べているのです。すなわち、例会が真の友情の芽生える場であれば、当然、会員の事業に助力を与えることにもなるというのが、Guy Gundaker の考えです。

例えば、クラブ入会の勧誘の際、

“ロータリークラブに入会すれば、それで商取引に繋がるなどと思ってはいけない。しかし、入会して例会出席に励み、交友やロータリー活動を通じて君の素晴らしさを会員の誰もが分かるようになり、そこに信頼と誠実に満ちた友情が芽生えれば、自然と商取引は増えるだろう。要は、君次第だ。”

と述べるのは、大いに結構だということです。

（← P8、P48『５．附記５ 新入会員に伝えて欲しいこと』参照）

要するに、ロータリアン同士の取引というのは、奉仕の心を互いに学び実践し、信頼と誠実に満ちた人間性、そして、そこに育まれる友情の「結果」だということです。
だからこそ、当地区の伊藤巳規男パストガバナーの言葉、

「ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい」（← P17 参照）

は、蓋し名言なのです。

③夕刻の例会について

Guy Gundaker は、

「夕刻の例会は、昼食例会より長い時間がとれるので、
個々の会員の向上と個々の会員の事業の向上を
達成するには、なおさら良い機会である」

と述べた上で、夕刻のプログラムは、より精選された素晴らしい話を中心にして構成するように推奨しています。それだけにロータリアンは、次の言葉を肝に銘じて欲しいと思います。

「夕刻の例会で、行事や議事、プログラムなどをなおざりにして、早めに懇親会へ移行しようというような不埒な考えを、ロータリアンたる者、決して抱いてはなりません」

彼は、夕刻の例会にふさわしい多数のプログラムを調査した結果、企業の実績に関する話題、事務機器やファッションに関する話題、都市計画の話題、公共問題の検討などが重要視されていると報告しています。その上で、ロータリーは事業経営者の議会のようなものであるのだから、

「行事や議事を迅速に進行するのはよいとしても、提案された問題を慎重に審議すること、充実したプログラムを満喫することなどを、心がけなければならない」

と述べているのです。

それ以外にも、近隣のクラブ同士の訪問、祝祭日の記念祝典なども重要視されていると報告しています。さらに、通常12月に行われる家族例会はクリスマスを祝した慈善活動事業の一部となっていること、ロータリー創立記念例会はロータリーの話、またはロータリアン同士の討論会として実施されていることなども報告しています。

また、新入会員の紹介は夕刻の例会で行うことを推奨した上で、

“会長は、新入会員にロータリーの話をするのが慣例となっている。これは、例会に参加している全会員に対して、ロータリーの理想を喚起する意味でも重要である。”

と述べています。

なお、新入会員を紹介する例会で、クラブ会長からぜひお話しして欲しい内容について、Guy Gundaker のロータリー観を踏まえたものを別項目にまとめましたので、ご参照ください。
（← P48『５．附記５ 新入会員に伝えて欲しいこと』参照）

いずれにしても、ロータリークラブの全ての例会は、出席者が時間を割くに値する充実した内容でなければなりません。特に夕刻の例会では、

“会員がロータリーの高い理想と意欲に燃えて、「自分の仕事、自分の業界、自分の家庭、自分の町や州や国 に対して優れた奉仕をしよう」という決意を新たにする場であって欲しい。”

と、Guy Gundaker は強調しているのです。

さて、本項目の冒頭で述べたように、ここの『３．会員に対するロータリークラブの義務と責任』は、Guy Gundaker が考える「クラブ奉仕の在るべき姿」と言ってよいでしょう。
その中でも特に、ロータリーにおける「親睦」と「例会」の重要性を強調しながら、
「親睦」については、

“ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌が「ロータリーの親睦」である。”

と述べた上で、「例会」については、

“例会は、クラブ会員の向上、会員の事業の向上、そして『ロータリーの目的』実現のために、最大限に活用する「学びの場」である。”

と述べているのです。

Guy Gundaker が考えていたロータリーの「基本」、「応用」＝「真髄」については、他の項目で解説してある通りです。（← P9、P32『４．【１】ロータリーの基本と応用』参照）
しかし、本項目を熟読すると、「親睦」と「学び」こそが「ロータリーの基盤（The base of Rotary）」であることも、見えてくるのではないでしょうか。

＜ロータリーの基盤（The base of Rotary）＞

ロータリーの「親睦」と「学び」とは、選ばれた異業種の仲間がロータリーの志を共にし、それを強め高め合いながら、立派なロータリアンに成るべく精進し合うことである。これこそ、「ロータリーの基盤（The base of Rotary）」である。

４．自己の職業分野と社会に対する「ロータリアンの義務と責任」

Guy Gundaker は本項目の冒頭で、**『ロータリーの核心』**として以下の４つを挙げた上で、

「ロータリークラブは、この４つのためにこそ様々な活動を考え、実行しなければならない」

と述べています。

> ロータリーは、以下に掲げる４つを最も重要視していることを、声高らかに表明する。
>
> １．会員自身が望んでいる自分自身の姿と様々な理想の達成
>
> ２．会員自身の職業における価値、そして会員の職業の有用性を広げていく義務
>
> ３．会員自身が自己の職業分野（業界）において果たすべき義務
>
> ４．会員自身が家庭、町、州、国において果たすべき義務
>
> *Rotary is the expression of man's belief—*
>
> *1. In himself and the ideals he hopes to achieve.*
>
> *2. In the worthiness of his occupation, and his duty to widen its sphere of usefulness.*
>
> *3. In the duty he owes to his own craft.*
>
> *4. In the duty he owes to his home and his town, state or province and country.*

上記４つの『核心』を別な表現で端的に言い換えれば、

「ロータリアンの成長、職業倫理、業界発展への貢献、社会への貢献」

でしょう。もちろん、これらは例会での「親睦と学び」の中で培われるというのが彼の考え方です。

なお、本項目の内容は、他の項目との重複が多いのが特徴です。復習を兼ねて、お読みください。

【１】ロータリーの基本と応用 ～～～

さて、21世紀に入ってからは、ロータリーの価値として「世界的な奉仕団体」という面ばかりが強調されているように思えてなりません。もちろん、「ロータリーの基本は奉仕である」ことを否定するつもりはありませんが、Guy Gundaker がクラブ・リーダーの重大な責務として明示した

「ロータリーの基本（Fundamental Rotary）とは、
ロータリアン自身の向上に関するクラブの諸活動、および
ロータリアンの事業向上に関するクラブの諸活動の２つである」

ことこそ、大いに強調するべきロータリーの価値ではないでしょうか。私は、Guy Gundaker が考える「ロータリーの基本」が軽視されるようでは、ロータリーの成長や発展はないと思います。

【２】自己の職業分野に対する「ロータリアンの義務と責任」～～～～～～～～～～～

ここは、本項目の冒頭で述べた「ロータリーの４つの核心」のうち、

「３．会員自身が自己の職業分野（業界）において果たすべき義務」

について述べたものです。内容的には、本書の

『１．【３】第3　会員の職種・業界全体の向上』（← P10参照）
『２．【２】③同業者の団体における活動』（← P19参照）

に関して、再度、Guy Gundaker が持論を大いに語ったものです。それだけに、他の項目に比べると饒舌、脱線気味で、少なからず難解な内容ですが、分かり易く整理して解説いたします。

①ロータリアンは、ロータリーから各々の業界に派遣した代表である

Guy Gundaker のロータリー観で、大きな特徴と言うべきものに

> ロータリアンは、業界の代表者ではない。ロータリーから各々の職種・業界に派遣された、ロータリークラブの代表者（大使）である。

があります。この考え方に基づいて、彼は

“ロータリアンは、他の同業者にロータリーの原理と理想を説き、「職業倫理の価値」と「利他主義の精神」を伝える **義務** があるとともに、自分の業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせる **義務** がある。そして、その業界を向上・発展させていくことこそ、ロータリーにとって最も大切な「奉仕の機会」なのである。”
（This is Rotary’s greatest opportunity for service.）

と述べています。

上記の内容は、もちろん現代にも通じることですし、むしろ大いに強調されるべきだと思います。汚職や改竄など、今でも悪しき習慣や因襲を糾弾される業界が少なからずあるからです。これに関連して、Guy Gundaker は

「自らの日常生活で、ロータリーの原則を実践に移さないロータリアンは、ロータリーの職業倫理の力強い先達（a forceful teacher of Rotary ethics）にはなれない」

と述べています。要するに、

「職業倫理を旨とするロータリアンは、先ず自らの日常でロータリーの原則を実践せよ」

ということです。その上で彼は、職業倫理の力強い先達となるべきロータリアンに対し、業界における具体的な活動として、以下の内容を求めているのです。

ロータリアンは自己の職業分野の業界団体（地元レベル、州レベル，全国レベル）に所属する義務があり、その団体において以下の５つの活動を積極的に行うべきである。

１．職業倫理の高い理想を志す者の考え方を支持し、同業者に指導すること
２．同業者に奉仕の精神を植え付け、奨励すること
３．アイディアや経営方法の交換によって、同業者の事業の効率を高めること
４．業界（自らが属する職種）の地位向上に努力すること
５．同業者相互間および業界全体の利益のために、同業者と協力すること

First: *Leading or supporting the thoughts of those present to high ideals in business morality..*
Second: *Stimulating service to their fellowmen.*
Third: *Increasing the efficiency of the craft by encouraging the exchange of ideas and business methods.*
Fourth: *Endeavoring to elevate the standing of the craft.*
Fifth: *Co-operating with their fellow craftsmen for the benefit of each and all.*

②ロータリアンとは、 本人と事業内容に絶大な信用がある人物である

Guy Gundaker は

“『道徳律（職業倫理訓）』でも記されているが、事業の上で強調しても強調し足りない最も重要なことは、「事業主本人および事業内容に対する信用の大切さ」である。”

と述べています。

この「信用の大切さ」こそ、Guy Gundaker のロータリー観における、もう一つの大きな特徴と言ってもよいでしょう。すなわち、

ロータリーの会員に選ばれるということは、
会員個人および会員の事業内容に絶大な信用があるということである。

実際、彼は

「ロータリアンは、安心して取引ができる人物である」

ことの理由について、

“迅速で確実な取引を行うということで評判が良いからではなく、
価格や性能の表示に偽りがない製品を提供することで評判が良いからではなく、
公正で適切な取引を行うということで評判が良いからでもなく、何と言っても、
既にロータリアン（会員本人とその事業内容に絶大な信用がある人）だからだ。”

と述べた上で、

“ロータリアンは、事業社会における最良の代表者である。
それだけに、その名に恥じないような生き方をしなくてはならない。”

と強調しているのです。

これは、

“ロータリアンは、「ロータリークラブの会員であるというだけで、会員本人および会員の事業内容に絶大な信用がある」という幸せ（特権）を得るのだから、当然、ロータリアンとしての義務と責任を十分に果たさなくてはならない。”

という、Guy Gundaker 特有の考え方によるものです。

以上のことに関連して、Guy Gundaker はロータリアンの心構えとして、以下のように述べています。

“ロータリーへの入会が認められた日から、その新入会員には多くのロータリアンが保有している信用が前貸しされる（すなわち、ロータリーに入会すれば、それだけで信用される）。そして、その信用があるからこそ、ロータリアン同士の取引も始まる。このような便宜と信頼を受けた以上、新入会員には、前借りした「信用という名の負債」を速やかに返済するべき義務が生じるのである（すなわち、便宜と信頼という恩恵に報いなくてはならない ＝ 信用に値する立派なロータリアンにならなくてはならない）。”

とした上で、

“ロータリアンたる者、自己の負債は速やかに返済しなければならない。さもなければ、ロータリアンがロータリーの名に恥じない如何なる行動をしても、周囲から信用してもらえない。また、いくら立派な職業倫理を掲げても、同業者はそれを受け入れようとか、採用しようとかはしないからである。”

③各業界における「道徳律（職業倫理訓）」作成の必要性

Guy Gundaker は、当時（20世紀初頭）の風潮について

“国民は、厳格で心の通った職業上の良心を業界に強く求めるようになった。”

と指摘しながら、

“全ての企業は、人類に奉仕しているという『社会奉仕（Social Service）』の考え方を受け容れざるを得なくなった。すなわち、倫理と事業は融和しなければならないということであり、これは実業界の革命と言ってもよいだろう。”

と明記しています。その上で、

“実際に職業上の良心が急速に高まってきたことは、次のような言葉が（20世紀初頭の当時）流行していることからも明らかである”

と述べています。すなわち、以下のような言葉です。

＊“信頼”は、賢い客の代名詞である

Treat the confiding and keen buyer alike.

＊真実と奉仕こそ、事業成功のコツ

Truth and service are handmaidens of business success.

＊事業経営の根本原則は、競争から協調へ

Competition as a cardinal business principle has been succeeded by co-operation.

＊“買い主は注意せよ”から“売り主は注意せよ”へ

“Let the seller beware” succeeds the old rule “Let the buyer beware”

さらに Guy Gundaker は、

“電話の普及などで、「文書による契約」から「口頭による取引」に変化してきた現在、あらゆる分野の業界において、高度に倫理性のある職業倫理基準の作成と徹底が必要である。しかし、広告業者クラブ連合会やクリーブランド不動産業者連合会など、その業界独自の『道徳律（職業倫理訓）』が作成された事例はあるものの、全国的には満足できるような状況ではない。”

と述べた上で、

「各業界おいて、『道徳律（職業倫理訓）』を起草する先駆けとなることは、ロータリアンの義務であると同時に特権である」

と明言しています。

具体的には、

「ロータリーの年次大会における業界別の協議会で、正しい商習慣の倫理訓を起草すべきである」

とした上で、その起草内容には、下記の留意点が満たされるべきであると述べています。

＜各業界で職業倫理訓を起草する際の留意点＞

１．すべての事業または専門職務に等しく適用される実務上の一般原則
２．事業または専門職務の会員資格に関する規定
３．会員相互関係に関する規定
４．一般消費者との関係についての規定
５．特別な仕様を取り決めた契約の作成と執行に関する規定
６．好ましくない商習慣の禁止

Craft or professional codes should include the following:

1. General rules of practice which apply equally well to all trades or professions.
2. A definition covering the qualifications of those eligible to membership in the craft or profession.
3. Statements covering relations between members.
4. Statements covering relations with the purchasing public.
5. Rules covering the making and executing of contracts with special reference to specifications.
6. Discouragement of practices which are reprehensible.

Guy Gundaker は、ロータリーに対して、業界に対して、そして社会に対して、本当に真摯で誠実、高潔な人物であったと思います。私は、彼を心から尊敬しています。

【３】社会に対する 「ロータリアンの義務と責任」～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ここは、本項目の冒頭で述べた「ロータリーの４つの核心」のうち、

「４．自分の家庭、町、州、国に負っている義務」

について述べたものです。内容的には、本書の

『２．【２】④公共的かつ慈善的奉仕』（← P20参照）

に関して、再度、Guy Gundaker が持論を大いに語ったものです。ここでも、他の項目に比べると饒舌、脱線気味で、少なからず難解な内容ですが、分かり易く整理して解説いたします。

①「他人のための活動」は、ロータリーの会員教育がもたらす

Guy Gundaker は、

“ロータリークラブに入会した者は、ロータリーの原則と慣例に基づく教育を受ける。そして、ロータリアンは、その教育の成果を「個人の向上（自己改善）の分野」と「他人のための活動の分野」で示すことが期待されており、ロータリークラブで学べば学ぶほど、その期待に応えたくなってしまうのである。”

と述べ、

“「他人のための活動の分野」において貢献することは、自己の職業分野と社会に対する「ロータリアンの義務と責任」である。”

としています。

上記に関連して、Guy Gundaker は「ロータリーの名誉会員」について、

> “ロータリーでは、名誉会員は不要である。特に、その町の居住者でない者や一次的な居住者、公職に一定期間ついている人などを名誉会員にすべきではない。なぜなら、規則正しく例会に出席できず、ロータリーで積極的に活動できない人は、ロータリアンにとって不可欠な二つの大切な要素（例会出席、クラブでの活動）を欠いているからである。”
>
> と述べた上で、
>
> “そもそも、名誉会員はロータリーの基本原理に矛盾するだけではなく、ロータリーで積極的に活動する会員の価値を減少させる。もしも名誉会員を認めるための抜け道があるとすれば、新入会員に関する会員選考委員会の厳格な審査は空しいものとなってしまう。”
>
> と言い切っています。

いずれにしても、

“ロータリーの例会は、学びの場である。例え名誉会員であっても、例会に出席せず、例会で学べないような人など、ロータリークラブの会員にしてはいけないのである。”

という、Guy Gundaker のロータリーに対する純粋で強い想い（気概）を感じさせる内容です。

但し、この名誉会員についての記載は、もちろん Guy Gundaker の気概には共感できるのですが、本筋からは少し脱線気味ですね。

②「良き家庭人」、「良き事業人」、「良き市民」

Guy Gundaker は、

“ロータリアンにとって、「他人のために何かしよう」という奉仕の心を実践する場合、最良の実践の場は家庭である。そこには家族愛があるからこそ、心のこもった態度で奉仕ができる。この家庭内での家族愛を実業の世界、そして町、州、国、世界へと及ぼし広げていくことが、ロータリアンの努め（義務と責任）と言ってよいだろう。”

と述べています。要するに、

“ロータリアンは、良き家庭人たれ！　良き事業人たれ！　良き市民たれ！”

ということです。

そのために、ロータリークラブは、会員に対して以下の知識を提供するべきであると述べています。

＊町の地理	＊地域社会の生活
＊町の産業活動	＊町の港湾地区と外国との交易
＊交通機関の状況、諸問題	＊公園や街路の状況
＊総合的な都市計画	＊町や地域の歴史
＊消防、警察、厚生、福祉などの自治体行政	

その上で、彼はロータリアンに対して、

“ロータリアンは、自分が住んでいる町に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、一人の市民として慈善的、博愛的、公共的な団体の会員として活動するべきである。ロータリアンなら、その団体の中で積極的、かつ効果的な活動をすることができるし、必要なことに対しては金払いもよい会員となるだろう。”

と記し、

“ロータリアンが一人の市民として行う奉仕活動にこそ、大きな価値がある。”

と述べているのです。

これは、Guy Gundaker のロータリーに対する考え方の特徴の１つでもある

１．ロータリーは、会員を「良い市民」、「業界団体の良い会員」、「所属する都市や国に忠誠を尽くす立派な人」となるように訓練をする場である。

２．ロータリーは、クラブとしての団体活動よりも、ロータリアン個人としての活動、またはロータリアンが所属する業界団体や市民組織の会員としての活動を通して、社会に貢献すべきである。

に繋がるものです。なお、この考え方は、別項目でも述べたように

“1923年に採択された『決議23-34』の ６）「社会奉仕活動の選択指針」”

に色濃く反映されています。（← P13参照）

③ロータリーの中立性

Guy Gundaker は、ロータリーの社会的影響力を考えた場合、

“ロータリークラブは、地元の問題や公共問題については
慎重な態度で臨み、軽々しく決議してはならない。
政治問題を取り上げることも、あってはならない。”

と戒めています。

また、不適切な問題がむやみにクラブ例会で話し合われることがないよう、

「会員がクラブに提案したい案件は、先ず担当委員会と理事会に提出し、
そこで十分に審議された後、クラブ提案に相応しいと理事会が決定した
場合のみ、理事会が次の例会で会員に提案する」

という手続きが必要であると述べています。

そのような手続きを踏まえた上で提案された問題については、

「理事会では、その案件がロータリーに相応しい内容か、そして
他のロータリークラブや国際ロータリーにどのような影響を及ぼすかなど、
事前に十分な検討が必要である」

とした上で、

「個々のクラブが、地元の問題、党派的な問題、国家的な問題などを取り上げる場合は、
地区内で影響が及ぶ他の全てのクラブから事前に了承を得る必要がある」

という留意点も記しています。

実際、これまで、クラブの計画そのものがロータリー本来の姿に相応しくなかったり、配慮が足らなかったり、慎重さに欠けたりなど、問題のある場合が少なくなかったことを Guy Gundaker は指摘し、憂いているのです。

また、国際ロータリーについては、ロータリークラブの設立や援助、運営の標準化を担うのであって、

「国際ロータリーは、一切、国家的または党派的な問題に関わってはならない」

と明記しています。

以上の内容の多くは、ロータリーの伝統として、今でも生き続けていると思います。Guy Gundaker の偉大さを、しみじみと感じますね。

なお、本項目の最後で、Guy Gundaker は次の言葉を記しています。巨大組織と言えるほどに発展した現在のロータリーですが、それでも心に留めておきたい言葉です。

ロータリーの小さな義務をきちんと果たせばいいだけだ。
そうすれば、ロータリーの歯車は正しく滑らかに回るのだから。
Only the small duties of Rotary can render
our Rotary wheel perfect and symmetrical.

5．附記（本解説書で、敢えて追加しておきたいこと）

附記１　Guy Gundaker のロータリー観 と「決議 23-34」

『決議 23-34』の採択当時（1923 年６月）、Guy Gundaker はＲＩ会長エレクトでした。もちろん、翌７月からはＲＩ会長です。それだけに、彼のロータリー観は、『決議 23-34』に色濃く反映されているのです。

ここでは、『１．ロータリークラブの構成と目的』の冒頭で「四つ目の注目すべき点」として述べた Guy Gundaker の考え方（← P6 参照）が、1923 年の『決議 23-34』の冒頭の文章、さらには現在の『ロータリーの目的（第３）』に受け継がれていったことについて、解説いたします。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

●ロータリーの基本：クラブ・リーダーの責務

第１．会員一人一人の向上

第２．会員の事業の向上　（現実と理想の双方において向上）

＜現実面＞

ロータリー活動を通して会員間に友情に満ちた親密な付き合いが生まれ、取引増加の機会が与えられる。

（但し、与えられるものは、取引増加の「機会」だけである）

＜理想面＞

ロータリー活動を通して、事業における高い倫理基準と正しい経営方法が体得できる。そして、<u>個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本でもあり、かつ職業倫理全般にも通じる **「奉仕という生き方（ロータリーの理想）」**を会員一人一人が学び合い、実践すること</u>で、事業が向上・発展する。

●ロータリーの応用（ロータリーの真髄）：クラブ会員の責務

第３．会員の職種・業界全体の向上

第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

（→ P9、P32『４．【１】ロータリーの基本と応用』参照）

実は、上記の「第２．会員の事業の向上」の **＜理想面＞** に記されている

“<u>個人生活、事業生活、社会生活など全ての場で実践すべき規範・手本でもあり、かつ職業倫理全般にも通じる **「奉仕という生き方（ロータリーの理想）」**</u>を会員一人一人が学び合い、実践すること”

が「事業の向上・発展」に繋がるだけではなく、さらに

＊「第３．会員の職種・業界全体の向上」

＊「第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」

にも繋がっていくという Guy Gundaker の考え方が、『決議 23-34』の冒頭の文章なのです。

＜決議 23-34（冒頭の文章）＞

ロータリーにおいて **社会奉仕** とは、ロータリアンのすべてがその個人生活、事業生活、および社会生活に奉仕の理想を適用することを奨励、育成することである。

ここで留意しておいて欲しいのは、上記の文中にある**「社会奉仕」**という言葉です。すなわち、『決議 23-34』が採択された1923年当時は、

『奉仕』 ＝ 家庭、クラブ、職場、業界、地域社会、州、国など、あらゆる場面や状況での奉仕であり、これら全体を呼称して『社会奉仕』とも表現する

ということであり、現代の「社会奉仕（＝ 地域社会奉仕）」とは区別が必要です。（← P4参照）

すなわち、『決議 23-34』の冒頭の文章で使われている**「社会奉仕」**とは、 あらゆる場面や状況での「奉仕」という意味であるということです。

そして、この『決議 23-34』の冒頭の文章から「社会奉仕」という用語を外した内容が、『ロータリーの目的（第３）』に受け継がれたのです。

＜ロータリーの目的（第３）＞
ロータリアン一人一人が、個人として、また事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること

以上が、本項目の冒頭で述べた「四つ目の注目すべき点」の解説です。

また、『決議 23-34』の冒頭の文章だけではなく、『決議 23-34』の ２）～ ６）も、Guy Gundaker のロータリー観が色濃く反映されているのです。これについては、本解説書を読み終えた後、『決議 23-34』の ２）～ ６）をじっくり読んでくだされば、納得していただけると思います。

附記２　ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割（具体例）

ここでは、下記の「第１．会員一人一人の向上」の５項目の内容を踏まえながら、

「Guy Gundaker に信奉する私が、寒河江ＲＣの会長時代（2009～2010 年）、どのようなクラブ運営を心がけ、実践したのか」

について、具体的に述べさせていただきます。皆様の参考になれば幸いです。

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の向上

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞

１）会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること
２）会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること
３）奉仕の心を涵養せしめること
４）自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること
５）優れた社会的指導者に育てること

第２．会員の事業の向上（現実と理想の双方において向上）
第３．会員の同業者・業界全体の向上
第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

先ず、私自身、クラブ会長として最も大切にしていた「信念」の１つは、

“「会員一人一人の向上」こそが、会員数の増加に繋がる。”

であり、それだけに

“「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実こそが会員増強の極意であり、クラブ会長の最大の責務である。”

と、肝に銘じておりました。（→ P6『１．【１】第１ 会員一人一人の向上』参照）

そのためにも、「第１．会員一人一人の向上」５項目の １）にある

「 会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がる」例会

を目指し、クラブ運営の重要項目として「会員スピーチの充実」を掲げたのです。具体的には、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで、毎回２名ずつ（１人 15 分間）の会員スピーチ例会を年間９回行いました。そして、各々の会員から、自らの生い立ち、事業経営上の体験（失敗談や成功談）、職業観、人生観、ロータリー観などを語ってもらいながら、会員間の敬愛の念とロータリー精神の熟成に努めました。

これ以外にも、ロータリーに精通したベテランのクラブ会員から、四大奉仕のフォーラム例会や特別月間例会などで基調講演（１人 15～30 分）をしていただき、会員が例会場の壇上でスピーチする機会を例年以上に増やしました。実際、私の会長年度の例会では、クラブ会員（50 名）のほぼ全員が、壇上でのスピーチを経験したのです。

一方、ゲストスピーチ例会は年間 14 回です。そのスピーチの内容は、行政、教育、金融、芸術、マスコミ、ロータリーなど多岐にわたりましたが、ゲストの人選には十分気を配り、「第１．会員一人一人の向上」５項目の ２）にある

「 会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させる」例会

に心がけました。

また、夜の例会は年間 13 回で、どれも飲食を含む懇親会をセットしました。ロータリー談義に花を咲かせながらの懇親の場は、まさにロータリーの志を高め深め合う「親睦」にも繋がるものであり、寒河江ＲＣの真骨頂です。

さて、上述したように、「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実こそがクラブ会長の最大の責務ですが、実は、その４つの中で会長の専権事項と言えるのは、

「会長挨拶（会長スピーチ）」

だけです。言い換えれば、これだけは会長にしかできませんし、会長が唯一の責任者です。

だからこそ、私は毎回の会長挨拶に「命をかける」思いと準備で取り組み、毎週、ロータリアンの矜持と喜びについて語り続けました。それだけに、私が最も気にしていたことは、例会終了後の

「今日の会長挨拶は、良かったね」

「今日の会長挨拶は、心が洗われた思いだよ」

などの、会員からの感想です。 （← P47『５．附記４ ④会長の任務と幹事の立場』参照）

（← 国際ロータリー第 2800 地区ＨＰ ロータリーを学ぶ「資料６．会長スピーチの心得」参照）

会長挨拶は、時間がたてば忘れられてしまいます。しかし、上記のような感想があったということは、少なくともその時は、「第１．会員一人一人の向上」５項目の ２）と ３）にある

クラブ会員の「思考の広がりと向上心の喚起」や「奉仕の心の涵養」

に繋がったはずです。それを毎週続けたのですから、十分な成果が上がった一年間だったように思います。

また、「第１．会員一人一人の向上」５項目の ４）と ５）にある

クラブ会員の「自己発展」や「指導者としての成長」

については、入会数年以内の若い会員育成を主眼としたクラブ運営に力を入れました。
なぜなら、それが若い会員の“質の強化”と“退会防止”、そして若い世代の“会員増加”にも繋がると信じていたからです。

その１つの方策として、理事会メンバーの「老・壮・青」のバランスに気を配りながら、私は敢えて入会３～４年目の若い会員５名を理事に抜擢しました。もちろん、彼らの力量を見抜いた上での人選です。また、彼らの担当委員会の副委員長は、面倒見が良くて、ロータリーの造詣も深いベテラン会員にやっていただきました。その上で、その副委員長と理事・役員の全員が一年間がっちりスクラムを組みながら、若い理事たちに思う存分の大活躍をしてもらったのです。

実は、寒河江ＲＣでは入会５～６年目で理事を経験するのが慣例で、当初は早過ぎる就任に批判的な意見もありました。しかし、周囲からの助言や援助のおかげで、彼らの例会での報告や説明、計画や準備の確かさなどが次第に評価されるようになり、やがて批判の言葉を耳にすることはなくなりました。それは、彼らが地道にロータリーを学び、理解し、実践に繋げていった証拠でもあります。

もちろん、経験不足から多少の失敗もありましたが、それも貴重な財産です。委員会活動にしても、若い感覚と押しの強さで、例年以上の盛り上がりと成果を見せてくれました。こうして、入会３～４年目の若い理事５名は、１年間で大いに自信をつけ、大きく成長したのです。

その後は、彼らは毎年のように理事・役員に引っ張りだこで、最近ではクラブ幹事や会長を任せられています。また、地区の委員長として活躍している人もいます。もちろん、彼らの友人・知人が次々と寒河江 RC に入会してきたことは、言うまでもないでしょう。

いずれにしても、「会員一人一人の向上」とは、Guy Gundaker の言う

「ロータリーの究極の目的は、世間から信頼・尊敬される
素晴らしい真のロータリアンを育てること」

そのものです。私としては、特に若い有望な人材を育てることの重要性を強調したいと思います。なぜなら、それが会員増強に繋がり、クラブの発展にも繋がるからです。もちろん、そのためには、「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実が大切です。

それだけに、「ロータリークラブの在るべき姿、目指すべき姿」が明確に記されている

『A Talking Knowledge of Rotary』は、クラブ会長心得そのもの

だと、私は思っています。

附記３　例会の大切さ

本解説書の『３．会員に対するロータリークラブの義務と責任』（← P24 参照）を読んでくださった方は、Guy Gundaker は「例会」を如何に重要視していたかがお分かりになったと思います。ここでは、以下に記した内容について、私見を交えながら述べさせていただきます。

> Guy Gundaker は、ロータリーの例会について
>
> **「会員の入会・退会の入れ替わりが相次ぐようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」**
>
> と述べています。私としては、
>
> **「例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」**
>
> と言いたいところです。
>
> （← P27『３．【３】「例会」や「行事」の在り方』参照）

私自身、せっかくロータリーへ入会したのに１～２年で退会してしまった人に対しては、

「ロータリーの素晴らしさを正しく理解できないうちに辞めてしまい、本当に残念だ」

という気持ちでいっぱいになります。しかも、その退会理由が転勤・転居以外のものだった場合、

- **●退会者に、「acquaintance（知り合い程度の交友）→ friendship（親しい者同士の友情）→ fellowship（ロータリーの志を共にする仲間意識）という流れ」を、クラブとして上手く作ってあげられなかったのではないか？**
- **●退会者本人にとっては、魅力や価値が感じられない例会ばかりだったのでなないか？**

と思ってしまいますし、もちろん自分自身の配慮不足についても反省します。

実際、そういう人は、仕事の多忙を理由に、普段から「例会」に欠席することが多かったのではないでしょうか。言うまでもなく、ロータリーの親睦を育むのに最も重要な場は「例会」です。その大事な「例会」に欠席ばかりしていては、親睦どころか、疎外感すら感じるようになり、クラブ会費も無駄な出費と考えるようになってしまい、結局は退会へと繋がってしまうのではないでしょうか。

それだけに、例会に欠席者が増えてきた場合、クラブ会長は重大な危機感を持つべきです。クラブの会員は、誰もが忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、どうにか仕事をやりくりして例会に出席しています。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う『何か』があるからです。だからこそクラブ会長には、その『何か』について、きちんと提供しているという認識と自負が必要なのです。その『何か』が十分でない例会であれば、当然、例会の欠席者は増えていくでしょう。だからこそ、クラブ会長は

「例会に欠席者が多いようでは、例会に魅力や価値がない証拠である」

という言葉で、普段の例会を省みて欲しいのです。その上で、実際に問題があるとすれば、クラブ理事会で最重要課題として取り上げ、実効性のある対策を検討しなくてはなりません。

なお、クラブ会長にとって、クラブ会員の士気を高めるために、そして会長に対する信頼と敬愛の念を会員の心に醸成していくために、なによりクラブの活性化をもたらすために、最大の武器となるのは「会長挨拶（会長スピーチ）」であることを忘れないでください。

（← P47『５．附記４ ④会長の任務と幹事の立場』参照）

（← 国際ロータリー第 2800 地区ＨＰ　ロータリーを学ぶ「資料６．会長スピーチの心得」参照）

附記４　充実したクラブ運営

ロータリアンからしばしば質問されることの一つに、

“ロータリーでは、なぜ「役員」と「理事」の区別があるのですか？”

というのがあります。こういう質問があるのは、日本のロータリークラブでは、役員が集まってクラブ運営について検討する「役員会」が軽視されているからではないでしょうか。

確かに、国際ロータリー定款細則、標準クラブ定款、推奨クラブ細則、ロータリー章典のどれを読んでも、「理事会」については記載がありますが、「役員会」については記載がありません。しかし、Guy Gundaker の主張する「充実したクラブ運営」を実現するには、役員が集まって検討するための「役員会」は必要なのです。

ここでは、『A Talking Knowledge of Rotary』には書かれていませんが、「充実したクラブ運営」を実現するために必要な知識と方法について、私見を交えながら述べさせていただきます。

①役員と理事 ～～～

役員会は、クラブの執行機関です。したがって、理事会に諮る議案の内容（各委員会の活動計画、予算、実施内容、決算、新たな提案など）を事前に検討しておくことは重要な任務です。そして、それらの議案を役員会でまとめ、必要な資料と一緒に理事会へ提出するのが幹事の仕事です。言い換えれば、役員会の中心的役割を担うのは（会長ではなく）幹事なのです。日本のロータリーでは、こうしたプロセスが軽視されているような気がします。

一方、理事会はクラブの決議機関（意思決定機関）で、クラブ運営に関する全ての管理責任を負います。だからこそ、「理事会メンバーと規定された役員」がいて、議決にも参加するのです。なお、理事会の決議は多数決なので、理事会の議長である会長といえども、決議に拘束されます。

理事会は、役員会から提出された議案を検討した上で、決議（承認・不承認・各種決定）を行います。理事は、各々が担当する委員会によって審議に臨む心構えや立場は異なりますが、理事会では活発な議論を行わなくてはなりません。そうした心がけや切磋琢磨が、ロータリーに対する見識を互いに深め合うことにもなるからです。

効果的で価値あるクラブ運営ができるかどうかは、会長や幹事をはじめとした理事会メンバーの心意気と責任感、ロータリーに対する認識の深さにかかっていると言ってもよいでしょう。

②幹事の任務 ～～～

③委員会の任務 ～～～

例会の帰り際、「今日の会長スピーチ、よかったよ」と言って出ていく会員が多ければ、それは誰もが「今日も来てよかった」と思ってくれた例会でしょう。もちろん、クラブの低迷など有り得ません。

会長は、クラブにおいても、また地域社会に対しても、クラブを代表する象徴的な立場です。常に「奉仕理念（超我の奉仕）」の提唱に心掛け、実践にあたっては率先して先頭に立たなければなりません。

これに対して、幹事はクラブ運営を丁寧かつ確実に取り仕切る立場です。会費の督促、会報発行や例会出欠の管理、欠席が多い会員やルールを守らない会員への指導、活動の鈍い委員会への奮励喚起など、幹事は汚れ役、嫌われ役をこなさなくてはなりません。だからこそ幹事は、普段から全ての会員に対して、高潔で公平公正、気配りと思いやりのある対応を心がけることが何よりも大切なのです。

古い言葉ですが、『好漢（頼もしく、感じのよい人）』と呼ばれるような人物こそ、幹事が目指して欲しい姿です。『役や立場が人を作る』という言葉がありますが、「幹事が終わったら、『好漢』に相応しい人になっていた」ということなら、クラブ内で最高の評価を受けたと言ってよいでしょう。

附記５　新入会員に伝えて欲しいこと

参考までに、新入会員を紹介する例会で、クラブ会長が話して欲しい内容の幾つかを提示します。

＜新入会員に伝えて欲しいこと＞

●ロータリーは、「①ロータリアン同士の親睦を基盤に、②立派なロータリアンを育てながら、③価値ある奉仕を通じて」社会に貢献する世界的な団体です。
もちろん、価値ある奉仕の中で最も重要なのは、職業奉仕です。

●「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合うことです。それは、ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌のようなものです。「ロータリアン同士の親睦を基盤に」とはそういう意味であり、「親睦なくして、ロータリーの成長はない」のです。

●ロータリークラブに入会したからといって、あなたに成功や幸福が約束されたわけではありません。あなたの素晴らしい人柄を多くのクラブ会員に知ってもらい、かつ信頼と誠実に満ちた真の友情が芽生えるよう、ロータリーを学び実践してください。そうすれば、ロータリーはあなたの人生を豊かに、充実したものにしてくれます。

●ロータリークラブは、「ロータリーの目的」の達成を目指す組織であり、会員自身の成長、しいては会員の事業の向上にも繋がるものです。さらに、多くの出会いや親睦、奉仕を通じて、会員の人生を豊かにしてくれます。

●その他：「ロータリーの目的」、「ロータリーの標語」、「四つのテスト」などの解説

附記６　ロータリーとは？

＜ロータリーの定義＞

①ロータリーの根本は、利己と利他の心を上手く調和させる「超我の奉仕」という名の人生哲学である。それは、実生活上、実に道理にかなった「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という言葉を実践の原理・原則とした人生哲学である。　（1923年：決議23-34 の１）＜一部改編／要約＞）

②ロータリーは、人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親善と平和の確立に寄与することを目指した、事業および専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体である。

（1976年ＲＩ理事会決定）

上記は、ロータリー章典にも記載されている「ロータリーの定義」です。個人的には、

①は、ロータリー情報としての「会員向けの説明」

②は、ロータリー広報としての「一般人向けの説明」

というように使い分けながら、説明に用いています。

しかし、『A Talking Knowledge of Rotary』の熟読を繰り返し、Guy Gundaker の真摯で熱き想いに触れていくと、上記の「ロータリーの定義 ① ②」では物足りなくなってきます。なぜなら、Guy Gundaker が重要視していた『親睦』と『学び』が触れられていないからです。

私は、Guy Gundaker が生きていれば、現代のロータリーを次のように定義するのではないかと思っています。

ロータリーは、事業、専門職務、地域社会のリーダーらによって構成され、
親睦と寛容、個人の資質向上、事業の維持・発展に努めるとともに、
家庭や仲間、職場、地域、国際社会における幸福の達成に寄与する
「奉仕の心と実践」に満ちた立派なロータリアンを育てる世界的な団体である。

（Guy Gundaker のロータリー観を元に、最近のＲＩの方針も加味して私が作成した文書）

個人的には上記で完璧だと思っていますが、文が長過ぎて覚えてもらえないでしょう。そこで、次のような「最も簡潔なロータリーの定義」を皆様に提案したいと思います。

ロータリーは、
①ロータリアン同士の親睦を基盤に、【親睦】
②立派なロータリアンを育てながら、【学び】
③価値ある奉仕を通じて　【奉仕】
社会に貢献する世界的な団体である。

なお、この「最も簡潔なロータリーの定義」については、

『６．解説のまとめ ＜その他＞ 附：「Guy Gundaker の ロータリー観」の 図式化』も参考にしてください。（← P62 参照）

６．解説のまとめ

＜『A Talking Knowledge of Rotary』の 歴史的価値＞

●Guy Gundaker（1873～1960）は、日本のロータリアンに最も強い影響を及ぼしたロータリアンの１人である。実際、これまで日本の著名なロータリアンが書物や講演などで述べてきたロータリーの解説は、その多くが“Guy Gundaker のロータリー観”であり、『A Talking Knowledge of Rotary』の内容である。そういう意味では、日本人が考える『ロータリーの原点』は、“Guy Gundaker のロータリー観”である。

●『A Talking Knowledge of Rotary』は、当時（1916 年）のロータリーの「一般奉仕概念」と「クラブ運営の在り方」を体系化したもので、史上初めてのロータリーの教科書・解説書である。それは、現代においても『クラブ会長心得』そのものである。

●『A Talking Knowledge of Rotary』に記された Guy Gundaker のロータリー観は、1923 年に採択された『決議 23-34』の冒頭の文章、および ２）～ ６）の文章、さらに現在の『ロータリーの目的（第３）』にも受け継がれている。

●1923 年に採択された『決議 23-34』の「６）ロータリークラブにおける社会奉仕活動の選択指針」の内容は、Guy Gundaker が『A Talking Knowledge of Rotary』の中で既に提示していた要点を詳述したものである。

●今後とも、Guy Gundaker のロータリー観である「Grow Rotarian」なくして、価値ある真の「Grow Rotary」は有り得ない。

＜Guy Gundaker が考える「ロータリーの根本」＞

① ロータリーは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させる運動である。

② ロータリーの究極の目的は、世間から信頼・尊敬される素晴らしい真のロータリアンを育てることである。

＜Guy Gundaker が考える「ロータリーの姿」＞

ロータリーとは、
　ロータリークラブにおいては「親睦と学びの場」であり、
　ロータリアンにおいては「人間性の向上」をもたらすものであり、
　仕事においては「事業の発展向上」に繋がるものであり、
　世間においては「世の中を良くしていく向上運動」であり、
　究極の目的は「素晴らしい真のロータリアン」を育てること
　　（Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians）
である。

＜ロータリーの基本、応用、真髄＞

＜ロータリーの基本：クラブ・リーダーの責務＞
●会員一人一人の向上 （会員の心に関わるもの）
●会員の事業の向上 （事業経営の精神に関わるもの）
＜ロータリーの応用（ロータリーの真髄）：クラブ会員の責務（Rotary - at - Work）＞
●会員の職種・業界全体の向上
●会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上

●『ロータリーの基本（Fundamental Rotary）』とは、「会員自身の向上」と「会員の事業の向上」をもたらすクラブの諸活動のことであり、クラブ・リーダーの責務でもある。

●『ロータリーの応用（Applied Rotary）』とは、「会員の職種・業界全体の向上」と「会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の向上」に関するロータリアンの諸活動のことである。これは、『ロータリーの真髄（The essence of Rotary）』と言ってもよい。ロータリーで十分に教育と訓練を受けた会員なら、そうした活動（Rotary - at - Work）を自然と始めてしまうものであり、それは個々の会員の責務でもある。
The essence of Rotary put-to-service becomes “Rotary applied.”

●『ロータリーの応用（Applied Rotary）』とは、他人のための活動の分野である。これこそ、自己の職業分野と社会に対する「ロータリアンの義務と責任」に相当する。

●ロータリーとは、自分自身を、事業を、職種・業界を、そして社会全体を向上させるという「向上運動」以外の何物でもない。

＜「ロータリーの親睦」と「ロータリーの基盤」＞

●「ロータリーの親睦（fellowship）」とは、ロータリーの志を共にする者同士の仲間意識を強め高め合うことである。それは、ロータリーという苗木が成長するために、その根に栄養を与えてくれる土壌のようなものである。

●ロータリーという苗木が立派に成長していくためには、『親睦』という栄養に満ちた土壌が必要である。親睦なくして、ロータリーの成長は有り得ない。

●ロータリーにおける親睦を育む『場』とは、「ロータリアンが出会い集う場の全て」である。もちろん、最も重要な『場』は、「ロータリーの例会」である。

●我々ロータリアンは、ロータリアンが出会い集う全ての場（親睦を育む場）において、経営を学び、会合や事業の進め方を学び、交際術や人間関係を学び、奉仕の心と実践を学び、ロータリアンとしての在り方を学んでいる。

●「ロータリーの良き親睦こそが、ロータリーの全てである」という考えは、間違いである。ロータリーでは、『親睦』は必要で重要だが、目的ではないし、全てでもない。

＜“acquaintance”と“friendship”と“fellowship”の違い＞

- “acquaintance”＝「知り合い程度の交友」
- “friendship”＝「親しい者同士の友情」
  （目的や理念には関係なく、親しい友人の間柄で使われる言葉）
- “fellowship”＝「志が同じ者同士の仲間意識」
  （チームや組織、団体など、目的や理念が同じ者同士の間柄で使われる言葉）

＜ロータリーの親睦（fellowship）＞

ロータリーでは、ロータリアンが出会い集う全ての場（親睦を育む場）を通じて、ロータリアン同士の付き合いを

“acquaintance”（知り合い程度の交友）
→ “friendship”（親しい者同士の友情）
→ “fellowship”（ロータリーの志を共にする仲間意識）

へと深めていくと同時に、

“fellowship”をさらに強め高め合っていくことで、

栄養に満ちた“親睦”という土壌が醸成されていく。

これによって、ロータリーという苗木が立派に成長していくのである。

「ロータリーの基盤（The base of Rotary）」とは、
選ばれた異業種の仲間がロータリーの志を共にし、それを強め高め合いながら、
立派なロータリアンに成るべく精進し合うという「親睦と学び」である。

＜クラブ・リーダー と クラブ運営＞

＜ロータリークラブの構成と目的＞

ロータリークラブは、異なった事業または専門職務から選ばれた者を以て構成され、次に掲げる目的を達成するために組織されたものである。

第１．会員一人一人の 向上
第２．会員の事業の 向上（現実と理想の双方において 向上）
第３．会員の同業者・業界全体の 向上
第４．会員の家庭、町、州、国、ならびに社会全体の 向上

＜ロータリークラブが会員に対して果たすべき役割＞

●会員一人一人の向上

１）会員同士が事業経営上の経験を交換し合い、見識が広がるようにしてあげること
２）会員の思考の幅を広げ、向上心を喚起させること
３）奉仕の心を涵養せしめること
４）自己発展の最大の可能性が得られるように支援すること
５）優れた社会的指導者に育てること

●ロータリーが他の団体と異なる点は、以下の３つである。
①限定会員制度（一業種・一会員制度）
②会員と会員の職種・業界の双方に関わる活動
③会員に対し、職業上の高い倫理を植え付ける義務を課すこと

●ロータリーの会員一人一人の向上（会員の質の強化）こそが、会員数の増加に繋がる。

●クラブの現状に満足せず、むしろ現状の問題点を見つけ出し、かつ改善していくことこそ、ロータリークラブの「会員に対する義務と責任」である。ロータリーが掲げる理想を達成するには、こうした不断の努力がクラブ・リーダー（クラブ役員）に必要である。

●ロータリークラブは、クラブや会員の現状を省察し、どうすれば理想的なクラブに発展するかを常に考えなければならない。その責任者は、クラブ会長である。

●クラブ行事、特に例会の充実こそが、「ロータリーと社会の発展」に繋がるのである。その責任者は、クラブ会長である。

●クラブ会長にとって最も大きな仕事は、「①心が洗われる会長挨拶、②会員の誰からも“今日も来てよかった”と言われる例会」の２つである。会長は、この２つに半ば命をかける気概があって欲しい。クラブの活性化の鍵は、まさに「会長の心意気」である。

●「例会運営、会長挨拶、例会プログラム、委員会活動」の４つの充実こそが会員増強の極意であり、クラブ会長の責務である。この４つの中で、会長の専権事項で、かつ会長に全責任があるものは、「会長挨拶」だけであることを忘れてはならない。

●クラブ会長にとって、クラブにおける会員の士気を高めるために、そして会長に対する信頼と敬愛の念を会員の心に醸成していくために、なによりクラブの活性化をもたらすために、最大の武器となるのは「会長挨拶（会長スピーチ）」である。

●心洗われる会長挨拶（会長スピーチ）の具体的な心得
「挨拶（スピーチ）の内容はもちろん、話すスピード（１分 300 字を推奨）、抑揚、間、表情、ジェスチャーなどにも気を配りながら、心をこめて話をすること」
（参考： 国際ロータリー第 2800 地区ＨＰ　ロータリーを学ぶ「資料６．会長スピーチの心得」）

●クラブ理事会では、計画立案や審議の流れの中で、クラブ会長は強力なリーダーシップを発揮する責務がある。理事が無関心であるからとか、委員が積極的でないからとかを理由に、クラブ会長はこの責務から免れることはできない。

●例会プログラムの年間スケジュールを計画立案する『年度当初の理事会』は、極めて重要である。例会プログラムの年間スケジュールが、「ＲＩの年度テーマ、地区目標、クラブ会長方針などの実現・達成に役立つものとなっているのか」と「会員自身の向上や会員の事業向上にとって、有意義な例会内容と言えるのか」について、十分な審議をするべきである。

●不適切な問題が、むやみにクラブ例会で話し合われることがあってはならない。
会員がクラブに提案したい案件は、先ず担当委員会と理事会に提出し、そこで十分に審議される必要がある。具体的には、その案件が「ロータリーに相応しい内容か、他のロータリークラブや国際ロータリーにどのような影響を及ぼすか」など、十分な検討が必要である。その結果、クラブ提案に相応しいと理事会が決定した場合のみ、次の例会で会員に提案するという手続きを理事会が行うのである。

●「充実したクラブ運営」を実現するには、クラブ理事会に諮る議案の内容（各委員会の活動計画、予算、実施内容、決算、新たな提案など）を事前に検討しておくために、役員の集まり（役員会）は必要である。その役員会の中心的役割を担うのは、（会長ではなく）幹事である。日本のロータリーは、こうしたプロセスが軽視されているように思われる。

●クラブ内の委員会活動は、会員間の意志の疎通を図り、友情を深めるために最も良い機会である。少人数の会合の中、ロータリー情報や互いの意見が盛んに交わされることで、親睦が深まっていくからである。

＜例会出席＞

●ロータリー運動におけるクラブの価値は、ロータリアンがクラブの例会にどのくらい積極的に出席するかにかかっている。

●ロータリーに、欠席は有り得ない。ロータリークラブの会員は、名誉あるロータリアンという地位を引き受けた以上、全ての例会へ常に出席する義務を負う。

●出席率が高く、退会しない会員こそ、クラブの大きな財産である。入会・退会が（転職や退職以外の理由で）毎年のように繰り返されるクラブは、衰退する運命にある。

●例会に欠席が多い会員はクラブを衰退させるので、入会後の声がけや教育が重要である。

●ロータリーに入会後、例会欠席が多い会員に対しては、罷免など、厳しい断固とした措置をとるべきである。それは、欠勤が多い社員を解雇するのと同じことである。

●クラブの会員は、誰もが仕事で忙しい中、時間を自己管理できる経営者であるからこそ、仕事をやりくりして例会に出席している。それは、食事のためではなく、例会に身を置きたいと思う『何か』が十分にあるからである。だからこそクラブ会長には、その『何か』について、きちんと提供しているという認識と自負が必要である。その『何か』が十分でない例会であれば、当然、例会の欠席者は増えていくであろう。

●欠席者が多い例会は、その例会に魅力や価値がない証拠である。

●毎回、心が洗われるような「会長挨拶」が行われているクラブでは、例会欠席者は少ないのではないだろうか。

＜例会＞

●例会は、「①クラブ会員の向上、②会員の事業の向上、③『ロータリーの目的』実現」のために、最大限に活用すべき「学びの場」である。その実現は、クラブ会長の責任である。”

●例会は、クラブ会員がロータリーの高い理想と意欲に燃えて、「自分の仕事、自分の業界、自分の家庭、自分の町や州や国に対して優れた奉仕をしよう」という決意を新たにする場であって欲しい。

●例会は、クラブ会員が奉仕の心を学び、理解し、価値ある実践に繋げていけるよう、奉仕の意欲を湧き立てていく場でなくてはならない。それが、「奉仕の扉を開く例会」である。

●ロータリーの高邁な理想を実現させていくには、与えられた例会時間は如何に少ないか！単純計算で年間 52 時間の昼食例会があるとすれば、ロータリーの理想実現のために最大限に活用できる時間は、例会後半の僅か 26 時間しかないのである。

●限りある少ない例会時間を有意義なものにするには、会員の未知の能力を引き出し、かつ会員同士の親交・理解にも繋がる例会であることが重要である。

●例会は、会員同士が胸襟を開いて真摯に語る（または語り合う）時間こそ大切である。

●「ロータリークラブにおけるロータリアンの活動」とは、例会で、会員同士が語り合う（討論、情報交換、意見交換をする）ことである。

●会員スピーチは有益であり、それを聴ける機会はクラブ会員の特権である。なぜなら、スピーチをする会員は、同業者の存在を気にせず、専門分野について正直に真実を語ることができるし、会員に役立つことを大いに教えることができるからである。

●会員の入会・退会の入れ替わりが相次ぐようでは、例会に魅力や価値がない証拠である。

●新入会員の歓迎例会では、クラブ会長は、ロータリーの話をするべきである。これは、例会に参加している全会員に対して、ロータリーの理想を喚起する意味でも重要である。

●夕刻の例会で、行事や議事、プログラムなどをなおざりにして、早めに懇親会へ移行しようというような不埒な考えを、ロータリアンたる者、決して抱いてはならない。

●真のロータリアンを育てるための「例会の充実」を疎かにしたまま、「地域社会と世界平和」に貢献する奉仕団体に徹するだけのロータリーなら、やがて衰退していくだろう。もしくは、ロータリーの名前だけを引き継いだ、新しい社会奉仕団体として生まれ変わるかだ。

＜ロータリー入会の条件＞

●ロータリー入会の条件は、

「以下の①②③について申し分なく、かつ④⑤⑥の全てに十分な期待を持てる人物」である。

①事業の管理者であること

②管理経営する事業所が、その職種・業界において指導的立場にあること

③人柄が高潔で、誰からも信頼・信用されていて、社交性がある人物

④入会後、ロータリーに対する熱意を持つであろう人物

⑤入会後、ロータリーの会合に出席を欠かさないであろう人物

⑥入会後、ロータリアンとしての実践活動を怠らないであろう人物

●ロータリアンになれる人にだけ、ロータリーへの入会を薦めなさい。

＜信用＞

●『道徳律（職業倫理訓）』の中でも触れられているが、事業で強調しても強調し足りない最も重要なことは、「事業主本人および事業内容に対する信用の大切さ」である。

●ロータリーの会員に選ばれるということは、会員個人および会員の事業内容に絶大な信用があるということである。

●ロータリアンは、「ロータリークラブの会員であるというだけで、会員本人および会員の事業内容に絶大な信用がある」という幸せ（特権）を得るのだから、当然、ロータリアンとしての義務と責任を十分に果たさなくてはならない。

●ロータリアンは、普段のロータリー活動を通して、他の会員から『信頼』を得ることが何よりも大切である。ロータリーは職業人の集まりなので、本来、「取引増加の機会」は備わっている。したがって、その『信頼』という財産を活かしながら、優れた商品、適正な価格などの『奉仕』に徹していけば、事業は向上・発展していくはずである。

●ロータリアンは、安心して取引ができる人物である。その理由は、

「迅速で確実な取引を行うということで評判が良いからではなく、
価格や性能の品質表示に偽りがない製品を提供することで評判が良いからではなく、
公正で適切な取引を行うということで評判が良いからでもなく、何と言っても、
既にロータリアン（会員本人とその事業内容に絶大な信用がある人）だから」である。

●ロータリアンは、現代の事業社会における最良の代表者（手本）である。それだけに、その名に恥じないような生き方をしなくてはならない。

●ロータリアンは安心して取引のできる人物である。これを、世に知らしめるべきである。だからこそ、全てのロータリアンは、信頼と奉仕の象徴として、常にロータリーのバッジをつけなければならない。

＜ロータリアン同士の商取引＞

●ロータリアン同士の商取引は、ロータリーの義務ではないし、ロータリーの本質でもないし、もちろんロータリーの存在理由でもない。ロータリーは職業人の集まりなので、単に、「商取引増加の機会」が備わっているだけのことである。すなわち、ロータリアン同士の商取引は、ロータリーにおいては単なる付随的な要素にしか過ぎないのである。

●ロータリークラブに入会すれば、それで商取引に繋がるなどと思ってはいけない。
しかし、次のことは言える。

“ロータリーの例会は親しみと友情の種が蒔かれ、それが育つ場である。その種は、食事を共にするロータリーの例会では、すくすくと育ちやすい。したがって、入会して例会出席に励み、交友やロータリー活動を通じて『人柄』の素晴らしさを会員の皆から認められるようになり、そこに『信頼』と『誠実』に満ちた真の友情が芽生えれば、商取引増加の機会に恵まれたロータリーを活かせるようになる。
そうなれば商取引は増えていくだろうし、自己の事業の向上・発展にも繋がるだろう。”

●ロータリアン同士の商取引というのは、奉仕の心を互いに学び実践し、信頼と誠実に満ちた人間性、そして、そこに育まれる友情の『結果』である。

＜同業者の団体＞

●ロータリアンは、業界の代表者ではなく、ロータリーから各々の職種・業界に派遣された「ロータリークラブの代表者（大使）」である。

●ロータリアンは、自己の業界に高い職業倫理基準と奉仕理念を広め、業界全体を向上・発展させていくという認識と義務を持たなくてはならない。

●「同業者の団体におけるロータリアンの活動」とは、ロータリーからの大使（a messenger）として、他の同業者にロータリーの原理と理想を説き、「職業倫理の価値」と「利他主義の精神」を伝える『義務』があるとともに、自分の業界における低次元の考え方や悪しき商習慣を終わらせる『義務』がある。そして、その業界を向上・発展させていくことこそ、ロータリーにとって最も大切な『奉仕の機会』なのである。

This is Rotary’s greatest opportunity for service.

ロータリアンは自己の職業分野の業界団体（地元レベル、州レベル，全国レベル）に所属する義務があり、その団体において以下の５つの活動を積極的に行うべきである。

１．職業倫理の高い理想を志す者の考え方を支持し、同業者に指導すること
２．同業者に奉仕の精神を植え付け、奨励すること
３．アイディアや経営方法の交換によって、同業者の事業の効率を高めること
４．業界（自らが属する職種）の地位向上に努力すること
５．同業者相互間および業界全体の利益のために、同業者と協力すること

＜地域社会との関係＞

●ロータリーは、会員をより良き市民に、そして同業者団体のより良きメンバーに成長させるための訓練の場である。だからこそロータリアンは、その地域社会、業界、そして所属する公共的な慈善団体において、積極的に価値ある行動をしなければならない。

●ロータリーは、クラブとしての団体活動よりも、ロータリアン個人としての活動、またはロータリアンが所属する業界団体や市民組織の会員としての活動を通して、社会に貢献すべきである。

●ロータリアンが一人の市民として行う奉仕活動にこそ、大きな価値がある。

●市民生活上、ロータリアンが関心を持つことについては、条件さえ合えばロータリークラブによる社会奉仕事業として団体行動をしてもよい。しかし、本来は、むしろ個人としての奉仕活動として行なうべきである。

●社会奉仕のためにロータリークラブが団体行動をするのは、特別な場合ならよい。但し、事前に慎重な配慮が必要である。特に、ロータリークラブとしての活動が、どの町にもあるような専門事業団体の活動と重複するものであってはならない。

●ロータリークラブは、地元の問題や公共問題については慎重な態度で臨み、軽々しく決議してはならない。政治問題を取り上げることも、あってはならない。

●地域社会のことで政党が決定した内容については、クラブとして賛否の意思表明をしてはならない。これは、クラブ会員間の尊い友情を守るためである。

●ロータリアンは、自分が住んでいる町に対する正しい知識、強い関心、そして愛着を持ち、一人の市民として慈善的、博愛的、公共的な団体の会員として活動するべきである。ロータリアンなら、その団体の中で積極的、かつ効果的な活動をすることができるし、必要なことに対しては、金払いもよい会員となるだろう。

●会員が市民生活の向上のために積極的に活動・参加できるよう、知識や知恵を提供するのは、クラブ役員の義務である。

●ロータリークラブは、会員に対して以下の知識を提供するべきである。

＊町の地理	＊地域社会の生活
＊町の産業活動	＊町の港湾地区と外国との交易
＊交通機関の状況、諸問題	＊公園や街路の状況
＊総合的な都市計画	＊町や地域の歴史
＊消防、警察、厚生、福祉などの自治体行政	

＜ロータリーの教育的性格＞

●ロータリーには、他のクラブにない特徴がある。それは、「教育的性格」である。
Rotary has a distinct field of its own and it is mainly educational in character.

●ロータリーは、会員を「良い市民」、「業界団体の良い会員」、「所属する都市や国に忠誠を尽くす立派な人」となるように訓練をする場である。

●ロータリークラブに入会した者は、ロータリーの原則と慣例に基づく教育を受ける。そして、ロータリアンは、その教育の成果を「個人の向上（自己改善）の分野」と「他人のための活動の分野」で示すことが期待されており、ロータリークラブで学べば学ぶほど、その期待に応えたくなってしまうのである。

＜ロータリアンの利益＞

●ロータリアンの利益とは、商品の生産原価と販売価格との差額から生ずる利益のような、ちっぽけな物ではない。

●ロータリアンの利益とは、より立派で、より心の大きな人間となって、自分自身に対しても、同僚のロータリアンに対しても、そして社会全体に対しても、より素晴らしい奉仕を提供する機会が与えられることである。

●ロータリアンである以上、世間からの信頼と尊敬によって事業は向上・発展するだろう。しかし、事業の向上・発展が利益なのではない。ロータリアンにとって本当の利益とは、“見よ、あの素晴らしきロータリアンを！”と称賛される喜びと誇りである。

＜真のロータリアン＞

●ロータリアンの種類は１つしかない。それは、次の４つの活動を積極的に行なう active Rotarian だけである。

＜ロータリアンとしての活動（active Rotarian）＞

①個人としての活動　　②ロータリークラブにおける活動
③同業者の団体における活動　　④公共的かつ慈善的奉仕

●ロータリアンは、次の４つについて明確な回答を持つと同時に、その自らの回答に相応しい実践をしなくてはならない。

１．ロータリアンにとって 「例会出席」 とは？
２．ロータリアンにとって 「活動」 とは？
３．ロータリアンにとって 「利益」 とは？
４．ロータリアンにとって 「究極の目的」 とは？

●「ロータリアンの個人としての活動」とは、
「ロータリーの理想と実践という目標を念頭に置きながら、ロータリーが説く
高い倫理基準と様々な奉仕を、自己の事業や専門職務において実践すること」
である。すなわち、『職業奉仕』そのものである。

●「ロータリアンの個人としての活動」（職業奉仕）こそ、最も重要である。

●職業倫理を旨とするロータリアンは、先ず自らの日常生活の中で、ロータリーの原則を実践しなくてはならない。

●ロータリアンは、奉仕能力の涵養を切望し、かつ奉仕に専念する人である。

●ロータリアンは、ロータリーの原理を体得するにつれて奉仕能力が向上するだけでなく、進んで奉仕したいという意欲が湧き上がり、奉仕に身を捧げるようになる。

●奉仕とは、奉仕すべき『事』と『人』とを行動に結びつけようとする心の過程である。それは、ロータリアンの「奉仕を実践したい」という『利他の心』の現れである。

●ロータリー活動を通じて「事業推進に必要な倫理および経営方法」と「ロータリーの理想（奉仕という生き方）」を学び、それらを日常生活の中で実践すれば、事業は向上・発展し、社会も良くなる。それは、ロータリアンの「使命（命の使い方）」である。

●ロータリアンが奉仕の心を実践する場合、最良の実践の場は家庭である。そこには家族愛があるからこそ、心のこもった態度で奉仕ができる。この家庭内での家族愛を実業の世界、そして町、州、国、世界へと及ぼし広げていくことが、ロータリアンの努め（義務と責任）と言ってよいだろう。

●ロータリアンは、良き家庭人たれ！　良き事業人たれ！　良き市民たれ！

●ロータリーでより良い人間に成長すれば、より良い実りある生活、より心のこもった交流や奉仕ができるようになり、それによって地域の誰もが幸せになっていく。

●ロータリーの究極の目的は、世間から信頼・尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」を育てることである。言い換えれば、ロータリーは社会に奉仕する団体ではなく、社会に奉仕する「素晴らしい真のロータリアン」を育てる団体である。
Evolution of Members of Rotary Clubs into Real Rotarians.

●ロータリーは、人間の内面の体質を改善する。すなわち、ロータリーの中で体験を積み、成長することによって、「素晴らしい真のロータリアン」になっていく。

●現在の『ロータリーの目的』を短い言葉で述べるとすれば、以下の内容になるだろう。
“世間から信頼され、尊敬される「素晴らしい真のロータリアン」になろう！”

●我々がロータリアンとして深い思索、研究、奉仕の実践、差別なき友愛に満ちた交友に明け暮れれば、“人としての成長は、必ず顔に現れる”という言葉の如く、やがて「素晴らしい真のロータリアン」の顔になっていく。

●真のロータリアンになろうとする者は、THE ROTARIAN 誌、各クラブの出版物、国際ロータリー定款、道徳律、ロータリーの目的（綱領）などを真摯に熟読しなければならない。そして、差別なき友愛に満ちた交友に没頭し、事業経営理論を身につけるために、成長（向上）という名の努力を惜しんではならない。

●ロータリアンは、他人の悪口や陰口を決して言ってはならない。

＜ロータリアンの喜び＞

●仕事や経営に緊張と多忙の日々を過ごす中、ロータリーでは気を許しあった仲間と奉仕を語り、人生を語る。仲間やクラブや住民の為に、知恵と汗と時間と多少のお金を出し合い、様々な奉仕事業に夢中で取り組む。なにより、そんな仲間との時間を楽しいと思う。それが、ロータリアンである。

●ロータリークラブは、『ロータリーの目的』の達成を目指す組織であり、会員自身の成長、そして会員の事業の向上に繋がるだけではなく、多くの出会いや親睦、奉仕を通じて、会員の人生を豊かにしてくれる。

●良きクラブ運営（クラブ奉仕）であればこそ、ロータリーの会員は奉仕の心が醸成し、円満な交際（誠実、責任、信頼、礼節、寛容、忍耐、義理人情）と上手な自己管理（生活、行動、時間）ができるようになり、人としての在り方や誇りを身につけ、貴重な出会い、成功や飛躍のチャンスを得ながら、リーダーシップ、高潔性、友情、敬愛に満ちた人物に成長していく。要するに、人生が豊かになっていくのである。

●本来なら出会えない異業種の会員が、ロータリーの志を共にする仲間となって睦み集う「親睦の喜び」、仕事や自己の在り方を「学ぶ喜び」、生活のあらゆる場面で社会に貢献する「奉仕の喜び」。そして、それらを楽しいと思う少年少女のような「純真さ」。なにより、自らを「我、道義の職業人たらん」と律し、自らを多少なりとも立派な人間であると思う「自尊感情」。だからこそ、ロータリーは人生を豊かにする。

●ロータリーに入会すると、本来なら出会うことすらなかったであろう立派な方々と友人となり、彼らのロータリアンとしての職業観や人生観、仕事、生き方、そして人柄に触れながら、事業の手続きや成功の道筋、職員管理、自己管理、円満な人間関係の在り方などを学び磨く中、いつしか自分も価値ある立派な生き方（ロータリー精神の涵養と実践）に励むようになるとともに、本来なら経験できなかったであろう素晴らしい機会や感動にも恵まれるのです。言い換えれば、ロータリーのおかげで人間的に成長すると同時に、人生も豊かになるのです。

＜その他＞

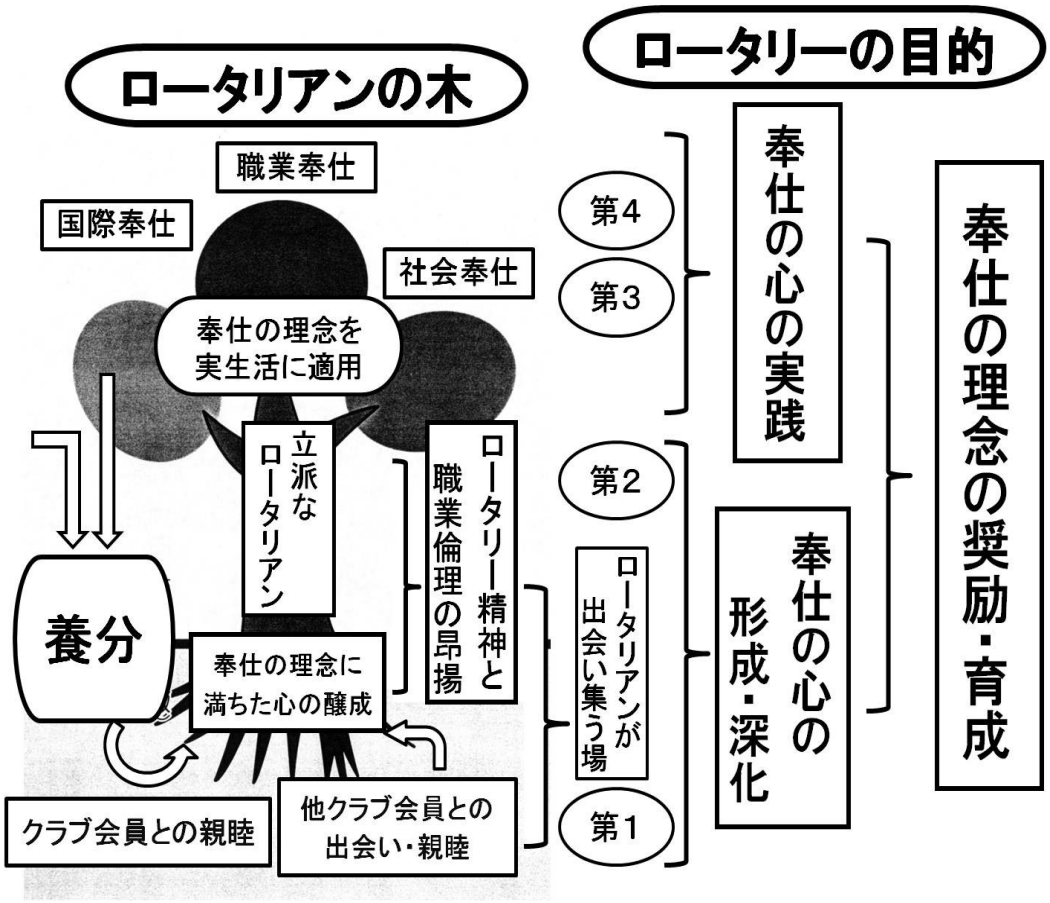
●ロータリークラブの設立や援助、運営の標準化を担う国際ロータリーは、
一切、国家的または党派的な問題に関わってはならない。

●可能な限り、あなた自身をロータリーに与えよ。そうすれば、あなたはロータリーから
様々な物を受け取ることができる。しかし、あなたが与えた物以上の物を、ロータリーから
受け取ることはできない。

●ロータリーの小さな義務をきちんと果たせばいいだけだ。
そうすれば、ロータリーの歯車は正しく滑らかに回るのだから。
Only the small duties of Rotary can render our Rotary wheel perfect and symmetrical.

●全てのロータリアンよ！
ひたむきにロータリーを見つめよう！
あるべき事業経営の真髄を求めて研究しよう！
我々の生活を奉仕に満ちた貴重な時間で満たそう！
そして、我々の心を差別なき友愛心で満たそう！

●附：「Guy Gundaker の ロータリー観」の 図式化



【出典：国際ロータリー第2800地区ＨＰ　ロータリーを学ぶ（鈴木一作）】